

第五十一回 貴族院議事速記録第十一號

大正十五年二月十五日(月曜日)

午前十時十三分開議

議事日程 第十一號 大正十五年二月十五日

午前十時開議

- 第一 民事訴訟法中改正法律案(政府提出) 第一讀會
- 第二 民事訴訟法中改正法律施行法案(政府提出) 第一讀會

○議長(公爵德川家達君) 是ヨリ書記官ヲシテ諸般ノ報告ヲ致サセマス

〔小林書記官朗讀〕

去ル十日衆議院ヨリ政府ニ於テ左ノ議案ヲ撤回セル旨ノ通牒ヲ受領セリ

明治四十年法律第二十一號中改正法律案

同日請願委員長ヨリ左ノ報告書ヲ提出セリ

請願文書表第三回報告書

去ル十二日政府ヨリ左ノ議案ヲ提出セリ

民事訴訟法中改正法律案

民事訴訟法中改正法律施行法案

一昨十三日衆議院ヨリ左ノ政府提出案ヲ受領セリ

簡易生命保險法中改正法律案

大正十四年勅令第二百四十五號(承諾ヲ求ムル件)

○議長(公爵德川家達君) 是ヨリ本日ノ會議ヲ開キマス、牧野子爵病氣ニ付キ會期中齋藤安雄君病氣ニ付キ十四日間ノ請假ノ申出ガゴザイマシタ、許可スルコトニ御異存ゴザイマセヌカ

〔異議ナシ〕ト呼ブ者アリ

○議長(公爵德川家達君) 御異議ナイト認メマス

○議長(公爵德川家達君) 議事日程第一、民事訴訟法中改正法律案、政府提出、第二、民事訴訟法中改正法律施行法案、政府提出、第一讀會、諸君ニ於テ御異議ナケレバ兩案トモ一括シテ説明ヲ煩ハシマス、司法大臣江木翼君

民事訴訟法中改正法律案

右

勅旨ヲ奉シ帝國議會ニ提出ス

大正十五年二月十二日

內閣總理大臣	若槻禮次郎
兼內務大臣	宇垣一成
陸軍大臣	財部彪
海軍大臣	幣原喜重郎
外務大臣	岡田良平
文部大臣	岡田良平
鐵道大臣	仙石貢
大藏大臣	濱口雄幸
逓信大臣	安達謙藏
司法大臣	江木翼
農林大臣	早速整爾
商工大臣	片岡直温

民事訴訟法中左ノ通改正ス

民事訴訟法目錄第一編乃至第五編ヲ左ノ如ク改ム

第一編 總則

第一章 裁判所

第一節 管轄

第二節 裁判所職員ノ除斥、忌避及回避

第二章 當事者

第一節 當事者能力及訴訟能力

第二節 共同訴訟

第三節 訴訟參加

第四節 訴訟代理人及輔佐人

第三章 訴訟費用

第一節 訴訟費用ノ負擔

第二節 訴訟費用ノ擔保

第三節 訴訟上ノ救助

第四章 訴訟手續

第一節 口頭辯論

第二節 期日及期間

第三節 送達

第四節 裁判

第五節 訴訟手續ノ中斷及中止

第二編 第一審ノ訴訟手續

第一章 地方裁判所ノ訴訟手續

第一節 訴

第二節 辯論ノ準備

第三節 證據

第一款 總則

第二款 證人訊問

第三款 鑑定

第四款 書證

第五款 檢證

第六款 當事者訊問

第七款 證據保全

第二章 區裁判所ノ訴訟手續

第三編 上訴

第一章 控訴

第二章 上告

第三章 抗告

第四編 再審

第五編 督促手續

民事訴訟法第一編乃至第五編ヲ左ノ左ク改ム

第一編 總則

第一章 裁判所

第一節 管轄

第一條 訴ハ被告ノ普通裁判籍所在地ノ裁判所ノ管轄ニ屬ス

第二條 人ノ普通裁判籍ハ住所ニ依リテ定ル

日本ニ住所ナキトキ又ハ住所ノ知レサルトキハ普通裁判籍ハ居所ニ依リ、居所ナキトキ又ハ居所ノ知レサルトキハ最後ノ住所ニ依リテ定ル

第三條 大使、公使其ノ他外國ニ在リテ治外法權ヲ享クル日本人カ前條ノ規定ニ依リ普通裁判籍ヲ有セサルトキハ其ノ者ノ普通裁判籍ハ東京市ニ在ルモノトス

第四條 法人其ノ他ノ社團又ハ財團ノ普通裁判籍ハ其ノ主タル事務所又ハ營業所ニ依リ、事務所又ハ營業所ナキトキハ主タル業務擔當者ノ住所ニ依リテ定ル

第五條 國ノ普通裁判籍ハ訴訟ニ付國ヲ代表スル官廳ノ所在地ニ依リテ定ル

第六條 第一項ノ規定ハ外國ノ社團又ハ財團ノ普通裁判籍ニ付テハ日本ニ於ケル事務所、營業所又ハ業務擔當者ニ之ヲ適用ス

第七條 財產權上ノ訴ハ義務履行地ノ裁判所ニ之ヲ提起スルコトヲ得

第八條 寄留者ニ對スル財產權上ノ訴ハ寄留地ノ裁判所ニ之ヲ提起スルコトヲ得

第九條 軍人、軍屬又ハ船員ニ對スル財產權上ノ訴ハ軍所用ノ廳舎ノ所在地又ハ艦船ノ本籍若ハ船籍ノ所在地ノ裁判所ニ之ヲ提起スルコトヲ得

第十條 日本ニ住所ナキ者又ハ住所ノ知レサル者ニ對スル財產權上ノ訴ハ請求若ハ其ノ擔保ノ目的又ハ差押フルコトヲ得ヘキ被告ノ財產ノ所在地ノ裁判所ニ之ヲ提起スルコトヲ得

第十一條 事務所又ハ營業所ヲ有スル者ニ對スル訴ハ其ノ事務所又ハ營業所ニ於ケル業務ニ關スルモノニ限り其ノ所在地ノ裁判所ニ之ヲ提起スルコトヲ得

第十二條 船舶又ハ航海ニ關シ船舶所有者其ノ他船舶ノ利用ヲ爲ス者ニ對スル訴ハ船籍ノ所在地ノ裁判所ニ之ヲ提起スルコトヲ得

第十三條 船舶債權其ノ他船舶ヲ以テ擔保スル債權ニ基ク訴ハ船舶ノ所在地ノ裁判所ニ之ヲ提起スルコトヲ得

第十二條 會社其ノ他ノ社團ヨリ社員ニ對スル訴又ハ社員ヨリ社員ニ對スル訴ハ社員タル資格ニ基クモノニ限リ會社其ノ他ノ社團ノ普通裁判籍所在地ノ裁判所ニ之ヲ提起スルコトヲ得

前項ノ規定ハ社團又ハ財團ヨリ役員ニ對スル訴及會社ヨリ發起人又ハ検査役ニ對スル訴ニ之ヲ準用ス

第十三條 會社其ノ他ノ社團ノ債權者ヨリ社員ニ對スル訴ハ社員タル資格ニ基クモノニ限リ前條ノ裁判所ニ之ヲ提起スルコトヲ得

第十四條 第十二條及前條ノ規定ハ社團、財團、社員又ハ社團ノ債權者ヨリ社員、役員、發起人又ハ検査役タリシ者ニ對スル訴及社員タリシ者ヨリ社員ニ對スル訴ニ之ヲ準用ス

第十五條 不法行為ニ關スル訴ハ其ノ行為アリタル地ノ裁判所ニ之ヲ提起スルコトヲ得

船舶ノ衝突ニ基ク損害賠償ノ訴ハ損害ヲ受ケタル船舶カ最初ニ到達シタル地ノ裁判所ニ之ヲ提起スルコトヲ得

第十六條 海難救助ニ關スル訴ハ救助アリタル地又ハ救助セラレタル船舶カ最初ニ到達シタル地ノ裁判所ニ之ヲ提起スルコトヲ得

第十七條 不動産ニ關スル訴ハ不動産所在地ノ裁判所ニ之ヲ提起スルコトヲ得

第十八條 登記又ハ登録ニ關スル訴ハ登記又ハ登録ヲ爲スヘキ地ノ裁判所ニ之ヲ提起スルコトヲ得

第十九條 相続權ニ關スル訴又ハ遺留分若ハ遺贈其ノ他死亡ニ因リテ效力ヲ生スヘキ行為ニ關スル訴ハ相続開始ノ時ニ於ケル被相続人ノ普通裁判籍所在地ノ裁判所ニ之ヲ提起スルコトヲ得

第二十條 相續債權其ノ他相續財産ノ負擔ニ關スル訴ニシテ前條ノ規定ニ該當セサルモノハ相續財産ノ全部又ハ一部カ前條ノ裁判所ノ管轄區域内ニ在ルトキニ限リ其ノ裁判所ニ之ヲ提起スルコトヲ得

第二十一條 一ノ訴ヲ以テ數個ノ請求ヲ爲ス場合ニ於テハ第一條乃至前條ノ規定ニ依リ一ノ請求ニ付管轄權ヲ有スル裁判所ニ其ノ訴ヲ提起スルコトヲ得

第二十二條 裁判所構成法ニ依リ管轄カ訴訟ノ目的ノ價額ニ依リテ定ルトキハ其ノ價額ハ訴ヲ以テ主張スル利益ニ依リテ之ヲ算定ス

前項ノ價額ヲ算定スルコト能ハサルトキハ其ノ價額ハ千圓ヲ超過スルモノト看做ス

第二十三條 一ノ訴ヲ以テ數個ノ請求ヲ爲ストキハ其ノ價額ヲ合算ス果實、損害賠償、違約金又ハ費用ノ請求カ訴訟ノ附帶ノ目的ナルトキハ其ノ價額ハ之ヲ訴訟ノ目的ノ價額ニ算入セス

第二十四條 左ノ場合ニ於テハ關係アル裁判所ニ共通スル直近上級裁判所ハ申立ニ因リ決定ヲ以テ管轄裁判所ヲ定ム

一 管轄裁判所及裁判所構成法第十三條第二項ノ規定ニ依リテ之ニ代ルヘキ裁判所カ法律上又ハ事實上裁判權ヲ行フコト能ハサルトキ

二 裁判所ノ管轄區域明確ナラサル爲管轄裁判所カ定ラサルトキ

前項ノ決定ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス

第二十五條 當事者ハ第一審ニ限リ合意ニ依リ管轄裁判所ヲ定ムルコトヲ得

前項ノ合意ハ一定ノ法律關係ニ基ク訴ニ關シ且書面ヲ以テ之ヲ爲スニ非サレハ其ノ效ナシ

第二十六條 被告カ第一審裁判所ニ於テ管轄違ノ抗辯ヲ提出セスシテ本案ニ付辯論ヲ爲シ又ハ準備手續ニ於テ申述ヲ爲シタルトキハ其ノ裁判所ハ管轄權ヲ有ス

第二十七條 第一條、第五條乃至第二十一條、第二十五條及前條ノ規定ハ訴ニ付專屬管轄ノ定アル場合ニハ之ヲ適用セス

第二十八條 裁判所ハ管轄ニ關スル事項ニ付職權ヲ以テ證據調ヲ爲スコトヲ得

第二十九條 裁判所ノ管轄ハ起訴ノ時ヲ標準トシテ之ヲ定ム

第三十條 裁判所ハ訴訟ノ全部又ハ一部カ其ノ管轄ニ屬セスト認ムルトキハ決定ヲ以テ之ヲ管轄裁判所ニ移送ス

第三十一條 裁判所ハ其ノ管轄ニ屬スル訴訟ニ付著キ損害又ハ遲滞ヲ避クル爲必要アリト認ムルトキハ其ノ專屬管轄ニ屬スルモノヲ除クノ外申立ニ因リ決定ヲ以テ訴訟ノ全部又ハ一部ヲ他ノ管轄裁判所ニ移送スルコトヲ得

第三十二條 移送ノ裁判ハ移送ヲ受ケタル裁判所ヲ羈束ス
移送ヲ受ケタル裁判所ハ更ニ事件ヲ他ノ裁判所ニ移送スルコトヲ得ス

第三十三條 移送ノ裁判ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

移送ノ申立ヲ却下シタル裁判ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス

第三十四條 移送ノ裁判確定シタルトキハ訴訟ハ初ヨリ移送ヲ受ケタル裁判所ニ繫屬シタルモノト看做ス

前項ノ場合ニ於テハ移送ノ裁判ヲ爲シタル裁判所ノ書記ハ其ノ裁判ノ正本ヲ訴訟記録ニ添附シ移送ヲ受ケタル裁判所ノ書記ニ之ヲ送付スルコトヲ要ス

第二節 裁判所職員ノ除斥、忌避及回避

第三十五條 判事ハ左ノ場合ニ於テハ法律上其ノ職務ノ執行ヨリ除斥セラ

一 判事又ハ其ノ妻若ハ妻タリシ者カ事件ノ當事者ナルトキ又ハ事件ニ付當事者ト共同權利者、共同義務者若ハ償還義務者タル關係ヲ有スルトキ

二 判事カ當事者ノ四親等内ノ血族若ハ三親等内ノ姻族ナルトキ又ハナリシトキ

三 判事カ當事者ノ後見人又ハ同居ノ戶主若ハ家族ナルトキ

四 判事カ事件ニ付證人又ハ鑑定人ト爲リタルトキ

五 判事カ事件ニ付當事者ノ代理人又ハ輔佐人ナルトキ又ハナリシトキ

六 判事カ事件ニ付仲裁判斷ニ關與シ又ハ不服ヲ申立テラレタル前審ノ裁判ニ關與シタルトキ但シ他ノ裁判所ノ囑託ニ因リ受託判事トシテ其ノ職務ヲ行フコトヲ妨ケス

第三十六條 除斥ノ原因アルトキハ裁判所ハ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ除斥ノ裁判ヲ爲ス

第三十七條 判事ニ付裁判ノ公正ヲ妨クヘキ事情アルトキハ當事者ハ之ヲ忌避スルコトヲ得

當事者カ判事ノ面前ニ於テ辯論ヲ爲シ又ハ準備手續ニ於テ申述ヲ爲シタルトキハ其ノ判事ヲ忌避スルコトヲ得ス但シ忌避ノ原因カ其ノ後ニ生シ又ハ當事者カ其ノ原因アルコトヲ知ラザリシトキハ此ノ限ニ在ラス

第三十八條 第三十六條又ハ前條ニ規定スル申立ハ其ノ原因ヲ開示シテ判事所屬ノ裁判所ニ之ヲ爲スコトヲ要ス

除斥又ハ忌避ノ原因ハ申立ヲ爲シタル日ヨリ三日内ニ之ヲ説明スルコト

ヲ要ス前條第二項但書ノ事實亦同シ

第三十九條 合議裁判所ノ判事ノ除斥又ハ忌避ニ付テハ其ノ裁判所、區裁判所ノ判事ノ除斥又ハ忌避ニ付テハ其ノ裁判所ノ所在地ヲ管轄スル地方裁判所決定ヲ以テ裁判ヲ爲ス

第四十條 判事ハ其ノ除斥又ハ忌避ニ付裁判ニ關與スルコトヲ得ス但シ意見ヲ述フルコトヲ得

第四十一條 除斥又ハ忌避ヲ理由アリトスル決定ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス之ヲ理由ナシトスル決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第四十二條 除斥又ハ忌避ノ申立アリタルトキハ其ノ申立ニ付テノ裁判ノ確定ニ至ル迄訴訟手續ヲ停止スルコトヲ要ス但シ急速ヲ要スル行爲ニ付テハ此ノ限ニ在ラス

第四十三條 第三十五條及第三十七條第一項ノ場合ニ於テハ判事ハ監督權アル判事ノ許可ヲ得テ回避スルコトヲ得

第四十四條 本節ノ規定ハ裁判所書記ニ之ヲ準用ス此ノ場合ニ於テハ裁判所書記所屬ノ裁判所之ヲ爲ス

第二章 當事者

第一節 當事者能力及訴訟能力

第四十五條 當事者能力及訴訟能力及訴訟無能力者ノ法定代理ハ本法ニ別段ノ定アル場合ヲ除クノ外民法其ノ他ノ法令ニ從フ訴訟行爲ヲ爲スニ必要ナル授權亦同シ

第四十六條 法人ニ非サル社團又ハ財團ニシテ代表者又ハ管理人ノ定アルモノハ其ノ名ニ於テ訴ヘ又ハ訴ヘラルルコトヲ得

第四十七條 共同ノ利益ヲ有スル多數者ニシテ前條ノ規定ニ該當セサルモノハ其ノ中ヨリ總員ノ爲ニ原告若ハ被告ト爲ルヘキ一人若ハ數人ヲ選定シ又ハ之ヲ變更スルコトヲ得

訴訟ノ繫屬ノ後前項ノ規定ニ依リテ原告又ハ被告ト爲ルヘキ者ヲ定メタルトキハ他ノ當事者ハ當然訴訟ヨリ脱退ス

第四十八條 前條ノ規定ニ依リテ選定セラレタル當事者中死亡其ノ他ノ事由ニ因リ其ノ資格ヲ喪失シタル者アルトキハ他ノ當事者ニ於テ總員ノ爲ニ訴訟行爲ヲ爲スコトヲ得

第四十九條 未成年者及禁治產者ハ法定代理人ニ依リテノミ訴訟行爲ヲ爲スコトヲ得但シ未成年者カ獨立シテ法律行爲ヲ爲スコトヲ得ル場合ハ此ノ限ニ在ラス

第五十條 準禁治產者、妻又ハ法定代理人カ相手方ノ提起シタル訴又ハ上訴ニ付訴訟行爲ヲ爲スニハ保佐人ノ同意、夫ノ許可又ハ親族會ノ同意其ノ他ノ授權ヲ要セス

準禁治產者、妻又ハ法定代理人カ訴、控訴若ハ上告ノ取下、和解、請求ノ拋棄若ハ認諾又ハ第七十二條ノ規定ニ依ル脱退ヲ爲スニハ常ニ特別ノ授權アルコトヲ要ス

第五十一條 外國人ハ其ノ本國法ニ依レハ訴訟能力ヲ有セサルトキト雖日本ノ法律ニ依レハ訴訟能力ヲ有スヘキトキハ之ヲ訴訟能力者ト看做ス

第五十二條 法定代理權又ハ訴訟行爲ヲ爲スニ必要ナル授權ハ書面ヲ以テ之ヲ證スルコトヲ要ス

第四十七條ノ規定ニ依ル當事者ノ選定及變更亦同シ
前項ノ書面ハ訴訟記録ニ之ヲ添附スルコトヲ要ス

第五十三條 訴訟能力、法定代理權又ハ訴訟行爲ヲ爲スニ必要ナル授權ノ欠缺アルトキハ裁判所ハ期間ヲ定メテ其ノ補正ヲ命シ若違滞ノ爲損害ヲ生スル虞アルトキハ一時訴訟行爲ヲ爲サシムルコトヲ得

第五十四條 訴訟能力、法定代理權又ハ訴訟行爲ヲ爲スニ必要ナル授權ノ欠缺アル者カ爲シタル訴訟行爲ハ其ノ欠缺ナキニ至リタル當事者又ハ法定代理人ノ追認ニ因リ行爲ノ時ニ遡リテ其ノ效力ヲ生ス

第五十五條 第五十三條及前條ノ規定ハ第四十七條ノ規定ニ依ル當事者カ訴訟行爲ヲ爲ス場合ニ之ヲ準用ス

第五十六條 法定代理人ナキ場合又ハ法定代理人カ代理權ヲ行フコト能ハサル場合ニ於テ未成年者又ハ禁治產者ニ對シ訴訟行爲ヲ爲サムトスル者ハ遲滞ノ爲損害ヲ受クル虞アルコトヲ疏明シテ受訴裁判所ノ裁判長ニ特別代理人ノ選任ヲ申請スルコトヲ得

裁判所ハ何時ニテモ特別代理人ヲ改任スルコトヲ得
特別代理人カ訴訟行爲ヲ爲スニハ後見人ト同一ノ授權アルコトヲ要ス
特別代理人ノ選任及改任ノ命令ハ特別代理人ニモ之ヲ送達スルコトヲ要ス

第五十七條 法定代理權ノ消滅ハ本人又ハ代理人ヨリ之ヲ相手方ニ通知スルニ非サレハ其ノ効ナシ但シ相手方カ其ノ事實ヲ知リタルトキハ此ノ限ニ在ラス

前項ノ規定ハ第四十七條ノ規定ニ依ル當事者ノ變更ニ之ヲ準用ス
第五十八條 本法中法定代理及法定代理人ニ關スル規定ハ法人ノ代表者及法人ニ非スシテ其ノ名ニ於テ訴ヘ又ハ訴ヘラルルコトヲ得ル社團又ハ財團ノ代表者又ハ管理人之ヲ準用ス

第二節 共同訴訟
第五十九條 訴訟ノ目的タル權利又ハ義務カ數人ニ付共通ナルトキ又ハ同一ノ事實上及法律上ノ原因ニ基クトキハ其ノ數人ハ共同訴訟人トシテ訴ヘ又ハ訴ヘラルルコトヲ得訴訟ノ目的タル權利又ハ義務カ同種ニシテ事實上及法律上同種ノ原因ニ基クトキ亦同シ

第六十條 他人間ノ訴訟ノ目的ノ全部又ハ一部ヲ自己ノ爲ニ請求スル者ハ其ノ訴訟ノ繫屬中當事者雙方ヲ共同被告トシ第一審ノ受訴裁判所ニ訴ヲ提起スルコトヲ得

第六十一條 共同訴訟人ノ一人ノ訴訟行爲又ハ之ニ對スル相手方ノ訴訟行爲及其ノ一人ニ付生シタル事項ハ他ノ共同訴訟人ニ影響ヲ及ホサス

第六十二條 訴訟ノ目的カ共同訴訟人ノ全員ニ付合一ニノミ確定スヘキ場合ニ於テハ其ノ一人ノ訴訟行爲ハ全員ノ利益ニ於テノミ其ノ效力ヲ生ス

共同訴訟人ノ一人ニ對スル相手方ノ訴訟行爲ハ全員ニ對シテ其ノ效力ヲ生ス
共同訴訟人ノ一人ニ付訴訟手續ノ中斷又ハ中止ノ原因アルトキハ其ノ中斷又ハ中止ハ全員ニ付其ノ效力ヲ生ス

第六十三條 第五十條第一項ノ規定ハ前條第一項ノ場合ニ於テ共同訴訟人ノ一人カ提起シタル上訴ニ付他ノ共同訴訟人ノ爲スヘキ訴訟行爲ニ之ヲ準用ス

第三節 訴訟參加
第六十四條 訴訟ノ結果ニ付利害關係ヲ有スル第三者ハ其ノ訴訟ノ繫屬中當事者ノ一方ヲ補助スル爲メ訴訟ニ參加スルコトヲ得

第六十五條 參加ノ申出ハ參加ノ趣旨及理由ヲ具シ參加ニ依リテ訴訟行爲ヲ爲スヘキ裁判所ニ之ヲ爲スコトヲ要ス

書面ニ依リテ參加ノ申出ヲ爲シタル場合ニ於テハ其ノ書面ハ之ヲ當事者雙方ニ送達スルコトヲ要ス

第六十六條 當事者カ參加ニ付異議ヲ述ヘタルトキハ參加ノ理由ハ之ヲ説明スルコトヲ要ス此ノ場合ニ於テハ裁判所ハ參加ノ許否ニ付決定ヲ以テ裁判ヲ爲ス

第六十七條 當事者カ參加ニ付異議ヲ述ヘシテ辯論ヲ爲シ又ハ準備手續ニ於テ申述ヲ爲シタルトキハ異議ヲ述フル權利ヲ失フ

第六十八條 參加人ハ參加ニ付異議アル場合ニ於テモ參加ヲ許ササル裁判確定セサル間ハ訴訟行爲ヲ爲スコトヲ得

第六十九條 參加人ハ訴訟ニ付攻撃又ハ防禦ノ方法ノ提出、異議ノ申立、上訴ノ提起其ノ他一切ノ訴訟行爲ヲ爲スコトヲ得但シ參加ノ時ニ於ケル訴訟ノ程度ニ從ヒ爲スコトヲ得サルモノハ此ノ限ニ在ラス

第七十條 前條ノ規定ニ依リテ參加人カ訴訟行爲ヲ爲スコトヲ得ス又ハ其ノ訴訟行爲カ效力ヲ有セザリシ場合、被參加人カ參加人ノ訴訟行爲ヲ妨ケタル場合及被參加人カ參加人ノ爲スコト能ハサル訴訟行爲ヲ故意又ハ過失ニ因リテ爲サザリシ場合ヲ除クノ外裁判ハ參加人ニ對シテモ其ノ效力ヲ有ス

第七十一條 訴訟ノ結果ニ因リテ權利ヲ害セラルヘキコトヲ主張スル第三者又ハ訴訟ノ目的ノ全部若ハ一部カ自己ノ權利ナルコトヲ主張スル第三者ハ當事者トシテ訴訟ニ參加スルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ第六十二條及第六十五條ノ規定ヲ準用ス

第七十二條 前條ノ規定ニ依リ自己ノ權利ヲ主張スル爲訴訟ニ參加シタル者アル場合ニ於テハ參加前ノ原告又ハ被告ハ相手方ノ承諾ヲ得テ訴訟ヨリ脱退スルコトヲ得但シ判決ハ脱退シタル當事者ニ對シテモ其ノ效力ヲ有ス

第七十三條 訴訟ノ繫屬中其ノ訴訟ノ目的タル權利ノ全部又ハ一部ヲ讓受ケタルコトヲ主張シ第七十一條ノ規定ニ依リテ訴訟參加ヲ爲シタルトキハ其ノ參加ハ訴訟ノ繫屬ノ初ニ遡リテ時効ノ中斷又ハ法律上ノ期間遵守ノ效力ヲ生ス

第七十四條 訴訟ノ繫屬中第三者カ其ノ訴訟ノ目的タル債務ヲ承繼シタルトキハ裁判所ハ當事者ノ申立ニ因リ其ノ第三者ヲシテ訴訟ヲ引受ケシムルコトヲ得

第七十五條 訴訟ノ目的カ當事者ノ一方及第三者ニ付合一ニノミ確定スヘキ場合ニ於テハ其ノ第三者ハ共同訴訟人トシテ訴訟ニ參加スルコトヲ得

第七十六條 當事者ハ訴訟ノ繫屬中參加ヲ爲スコトヲ得ル第三者ニ其ノ訴訟ノ告知ヲ爲スコトヲ得

第七十七條 訴訟告知ヲ受ケタル者ハ更ニ訴訟告知ヲ爲スコトヲ得

第七十八條 訴訟告知ヲ受ケタル者カ參加セザリシ場合ニ於テモ第七十條ノ規定ノ適用ニ付テハ參加スルコトヲ得ヘカリシ時ニ參加シタルモノト看做ス

第七十九條 法令ニ依リテ裁判上ノ行爲ヲ爲スコトヲ得ル代理人ノ外辯護士ニ非サレハ訴訟代理人タルコトヲ得但シ區裁判所ニ於テハ許可ヲ得テ辯護士ニ非サル者ヲ訴訟代理人ト爲スコトヲ得

第八十條 訴訟代理人ノ權限ハ書面ヲ以テ之ヲ證スルコトヲ要ス

前項ノ書面カ私文書ナルトキハ裁判所ハ當該吏員ノ認證ヲ受クヘキ旨ヲ訴訟代理人ニ命スルコトヲ得

第四節 訴訟代理人及輔佐人

第七十九條 法令ニ依リテ裁判上ノ行爲ヲ爲スコトヲ得ル代理人ノ外辯護士ニ非サレハ訴訟代理人タルコトヲ得但シ區裁判所ニ於テハ許可ヲ得テ辯護士ニ非サル者ヲ訴訟代理人ト爲スコトヲ得

第八十條 訴訟代理人ノ權限ハ書面ヲ以テ之ヲ證スルコトヲ要ス

前項ノ書面カ私文書ナルトキハ裁判所ハ當該吏員ノ認證ヲ受クヘキ旨ヲ訴訟代理人ニ命スルコトヲ得

前二項ノ規定ハ當事者カ口頭ヲ以テ訴訟代理人ヲ選任シ裁判所書記カ調書ニ其ノ陳述ヲ記載シタル場合ニハ之ヲ適用セス

第八十一條 訴訟代理人ハ委任ヲ受ケタル事件ニ付反訴、參加、強制執行、假差押及假處分ニ關スル訴訟行爲モ亦之ヲ爲スコトヲ得

左ニ掲クル事項ニ付テハ特別ノ委任ヲ受クルコトヲ要ス

一 反訴ノ提起

二 訴ノ取下、和解、請求ノ拋棄若ハ認諾又ハ第七十二條ノ規定ニ依ル

脱退

三 控訴、上告又ハ其ノ取下

四 代理人ノ選任

訴訟代理權ハ之ヲ制限スルコトヲ得ス但シ辯護士ニ非サル訴訟代理人ニ付テハ此ノ限リニ在ラス

第八十二條 數人ノ訴訟代理人アルトキハ各自當事者ヲ代理ス

當事者カ前項ノ規定ニ異ル定ヲ爲スモ其ノ效力ヲ生セス

第八十三條 第八十一條及前條ノ規定ハ法令ニ依リテ裁判上ノ行爲ヲ爲スコトヲ得ル代理人ノ權限ヲ妨ケス

第八十四條 訴訟代理人ノ事實上ノ陳述ハ當事者カ直ニ之ヲ取消シ又ハ更正シタルトキハ其ノ效力ヲ生セス

第八十五條 訴訟代理權ハ當事者ノ死亡若ハ訴訟能力ノ喪失、當事者タル法人ノ合併ニ因ル消滅、當事者タル受託者ノ信託ノ任務終了又ハ法定代理人ノ死亡、訴訟能力ノ喪失若ハ代理權ノ消滅、變更ニ因リテ消滅セス

第八十六條 一定ノ資格ヲ有スル者ニシテ自己ノ名ヲ以テ他人ノ爲訴訟ノ當事者タルモノノ訴訟代理人ノ代理權ハ當事者ノ資格ノ喪失ニ因リテ消滅セス

前項ノ規定ハ第四十七條ノ規定ニ依リテ選定セラレタル當事者カ其ノ資格ヲ喪失シタル場合ニ之ヲ適用ス

第八十七條 第五十二條第二項、第五十三條、第五十四條及第五十七條ノ規定ハ訴訟代理ニ之ヲ適用ス

第八十八條 當事者又ハ訴訟代理人ハ裁判所ノ許可ヲ得テ輔佐人ト共ニ出頭スルコトヲ得此ノ許可ハ何時ニテモ之ヲ取消スコトヲ得

輔佐人ノ陳述ハ當事者又ハ訴訟代理人カ直ニ之ヲ取消シ又ハ更正セサル

トキハ自ラ之ヲ爲シタルモノト看做ス

第三章 訴訟費用

第一節 訴訟費用ノ負擔

第八十九條 訴訟費用ハ敗訴ノ當事者ノ負擔トス

第九十條 裁判所ハ事情ニ從ヒ勝訴ノ當事者ヲシテ其ノ權利ノ伸張若ハ防禦ニ必要ナラサル行爲ニ因リテ生シタル訴訟費用又ハ訴訟ノ程度ニ於テ相手方ノ權利ノ伸張若ハ防禦ニ必要ナリシ行爲ニ因リテ生シタル訴訟費用ノ全部又ハ一部ヲ負擔セシムルコトヲ得

第九十一條 當事者カ適當ノ時期ニ攻撃若ハ防禦ノ方法ヲ提出セサル爲又ハ期日若ハ期間ノ懈怠其ノ他當事者ノ責ニ歸スヘキ事由ニ因リ訴訟ヲ遲滯セシメタルトキハ裁判所ハ之ヲシテ其ノ勝訴ノ場合ニ於テ遲滯ニ因リテ生シタル訴訟費用ノ全部又ハ一部ヲ負擔セシムルコトヲ得

第九十二條 一部敗訴ノ場合ニ於テ各當事者ノ負擔スヘキ訴訟費用ハ裁判所ノ意見ヲ以テ之ヲ定ム但シ事情ニ從ヒ當事者ノ一方ヲシテ訴訟費用ノ全部ヲ負擔セシムルコトヲ得

第九十三條 共同訴訟人ハ平等ノ割合ヲ以テ訴訟費用ヲ負擔ス但シ裁判所ハ事情ニ從ヒ共同訴訟人ヲシテ連帶シテ訴訟費用ヲ負擔セシメ又ハ他ノ方法ニ依リテ之ヲ負擔セシムルコトヲ得

第九十四條 第八十九條乃至前條ノ規定ハ當事者カ參加ニ付異議ヲ述ヘタル場合ニ於テハ其ノ異議ニ因リテ生シタル訴訟費用ノ參加人ト異議ヲ述ヘタル當事者トノ間ニ於ケル負擔ニ關シ之ヲ適用ス參加ニ因リテ生シタル訴訟費用ノ參加人ト相手方トノ間ニ於ケル負擔ニ付亦同シ

第九十五條 裁判所ハ事件ヲ完結スル裁判ニ於テ職權ヲ以テ其ノ審級ニ於ケル訴訟費用ノ全部ニ付裁判ヲ爲スコトヲ要ス但シ事情ニ從ヒ事件ノ一部又ハ中間ノ争ニ關スル裁判ニ於テ其ノ費用ノ裁判ヲ爲スコトヲ得

第九十六條 上級裁判所カ本案ノ裁判ヲ變更スル場合ニ於テハ訴訟ノ總費用ニ付裁判ヲ爲スコトヲ要ス事件ノ差戻又ハ移送ヲ受ケタル裁判所カ其ノ事件ヲ完結スル裁判ヲ爲ス場合亦同シ

第九十七條 當事者カ裁判所ニ於テ和解ヲ爲シタル場合ニ於テ和解ノ費用及訴訟費用ノ負擔ニ付別段ノ定ヲ爲ササルトキハ其ノ費用ハ各自之ヲ負擔ス

第九十八條 法定代理人、訴訟代理人、裁判所書記又ハ執達吏カ故意又ハ重大ナル過失ニ因リテ無益ナル費用ヲ生セシメタルトキハ受訴裁判所ハ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ此等ノ者ニ對シ其ノ費用額ノ償還ヲ命スルコトヲ得

前項ノ規定ハ法定代理人又ハ訴訟代理人トシテ訴訟行爲ヲ爲シタル者カ其ノ代理權又ハ訴訟行爲ヲ爲スニ必要ナル授權アルコトヲ證明スルコト能ハス又ハ追認ヲ得サリシ場合ニ於テ其ノ訴訟行爲ニ因リテ生シタル訴訟費用ニ之ヲ準用ス

前二項ノ決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第九十九條 裁判所カ前條第二項ノ場合ニ於テ訴ヲ却下シタルトキハ訴訟費用ハ代理人トシテ訴訟行爲ヲ爲シタル者ノ負擔トス

第一百條 裁判所カ訴訟費用ノ負擔ヲ定ムル裁判ニ於テ其ノ額ヲ定メサルトキハ第一審ノ受訴裁判所ハ其ノ裁判カ執行力ヲ生シタル後申立ニ因リ決定ヲ以テ之ヲ定ム

訴訟費用額ノ確定ヲ求ムル申立ヲ爲スニハ費用計算書及其ノ謄本並費用額ノ疏明ニ必要ナル書面ヲ提出スルコトヲ要ス

第一項ノ決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第一百一條 裁判所ハ訴訟費用額ヲ定ムル決定ヲ爲ス前相手方ニ費用計算書ノ謄本ヲ交付シ陳述ヲ爲スヘキ旨並一定ノ期間内ニ費用計算書及費用額ノ疏明ニ必要ナル書面ヲ提出スヘキ旨ヲ催告スルコトヲ要ス

相手方カ期間内ニ前項ノ書面ヲ提出セサルトキハ裁判所ハ申立人ノ費用ノミニ付裁判ヲ爲スコトヲ得但シ相手方ノ費用額ノ確定ヲ求ムル申立ヲ妨ケス

第一百二條 裁判所カ訴訟費用額ヲ定ムル裁判ヲ爲ス場合ニ於テハ前條第二項ノ場合ヲ除クノ外各當事者ノ負擔スヘキ費用ハ其ノ對當額ニ付相殺アリタルモノト看做ス

第一百三條 第九十七條ノ場合ニ於テ當事者カ訴訟費用ノ負擔ヲ定メ其ノ額ヲ定メサルトキハ裁判所ハ申立ニ因リ決定ヲ以テ其ノ額ヲ定ムルコトヲ

要ス此ノ場合ニ於テハ第一百條第二項第三項、第一百一條及前條ノ規定ヲ準用ス

第一百四條 前條ノ場合ヲ除クノ外訴訟カ裁判ニ因ラスシテ完結シタルトキハ裁判所ハ申立ニ因リ決定ヲ以テ訴訟費用ノ額ヲ定メ且其ノ負擔ヲ命スルコトヲ要ス參加又ハ之ニ付テ異議ノ取下アリタルトキ亦同シ

第八十九條乃至第九十四條、第一百條第二項第三項、第一百一條及第一百二條ノ規定ハ前項ノ場合ニ之ヲ準用ス

第一百五條 裁判所ハ裁判所書記ヲシテ訴訟費用額ノ計算ヲ爲サシムルコトヲ得

第一百六條 費用ヲ要スル行爲ニ付テハ裁判所ハ當事者ヲシテ其ノ費用ヲ豫納セシムルコトヲ得

當事者カ裁判所ノ命ニ從ヒ費用ヲ豫納セサルトキハ裁判所ハ前項ノ行爲ヲ爲ササルコトヲ得

第二節 訴訟費用ノ擔保

第一百七條 原告カ日本ニ住所、事務所及營業所ヲ有セサルトキハ裁判所ハ被告ノ申立ニ因リ訴訟費用ノ擔保ヲ供スヘキコトヲ原告ニ命スルコトヲ要ス擔保ニ不足ヲ生シタルトキ亦同シ

前項ノ規定ハ請求ノ一部ニ付争ナキ場合ニ於テ其ノ額カ擔保ニ十分ナルトキハ之ヲ適用セス

第一百八條 擔保ヲ供スヘキ事由アルコトヲ知りタル後被告カ本案ニ付辯論ヲ爲シ又ハ準備手續ニ於テ申述ヲ爲シタルトキハ擔保ノ申立ヲ爲スコトヲ得

第一百九條 擔保ノ申立ヲ爲シタル被告ハ原告カ擔保ヲ供スル迄應訴ヲ拒ムコトヲ得

第一百十條 裁判所ハ擔保ヲ供スヘキコトヲ命スル決定ニ於テ擔保額及擔保ヲ供スヘキ期間ヲ定ムルコトヲ要ス

擔保額ハ被告カ各審ニ於テ支出スヘキ費用ノ總額ヲ標準トシテ之ヲ定ム

第一百十一條 擔保ノ申立ニ關スル裁判ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第一百十二條 擔保ヲ供スルニハ金錢又ハ裁判所カ相當ト認ムル有價證券ヲ供託スルコトヲ要ス但シ當事者カ別段ノ契約ヲ爲シタルトキハ其ノ契約ニ依ル

第百十三條 被告ハ訴訟費用ニ付前條ノ規定ニ依リテ供託シタル金錢又ハ有價證券ノ上ニ質權者ト同一ノ權利ヲ有ス

第百十四條 原告カ擔保ヲ供スヘキ期間内ニ之ヲ供セサルトキハ裁判所ハ口頭辯論ヲ經スシテ判決ヲ以テ訴ヲ却下スルコトヲ得但シ判決前擔保ヲ供シタルトキハ此ノ限ニ在ラス

第百十五條 擔保ヲ供シタル者カ擔保ノ事由止ミタルコトヲ證明シタルトキハ裁判所ハ申立ニ因リ擔保取消ノ決定ヲ爲スコトヲ要ス

擔保ヲ供シタル者カ擔保取消ニ付擔保權利者ノ同意ヲ得タルコトヲ證明シタルトキ亦前項ニ同シ

訴訟ノ完結後裁判所カ擔保ヲ供シタル者ノ申立ニ因リ擔保權利者ニ對シ一定ノ期間内ニ其ノ權利ヲ行使スヘキ旨ヲ催告シ擔保權利者カ其ノ行使ヲ爲ササルトキハ擔保取消ニ付擔保權利者ノ同意アリタルモノト看做ス

第一項及第二項ノ規定ニ依ル決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第百十六條 裁判所ハ擔保ヲ供シタル者ノ申立ニ因リ決定ヲ以テ供託シタル擔保物ノ變換ヲ命スルコトヲ得

前項ノ規定ハ供託シタル擔保ヲ契約ニ因リテ他ノ擔保ニ變換スルコトヲ妨ケス

第百十七條 第百九條、第百十條第一項及第百十一條乃至前條ノ規定ハ他ノ法令ニ依リテ訴ノ提起ニ付供スヘキ擔保ニ之ヲ準用ス

第三節 訴訟上ノ救助

第百十八條 訴訟費用ヲ支拂フ資力ナキ者ニ對シテハ裁判所ハ申立ニ因リ訴訟上ノ救助ヲ與フルコトヲ得但シ勝訴ノ見込ナキニ非サルトキニ限ル

第百十九條 訴訟上ノ救助ハ各審ニ於テ之ヲ與フ救助ノ事由ハ之ヲ疏明スルコトヲ要ス

第百二十條 訴訟上ノ救助ハ訴訟及強制執行ニ付左ノ效力ヲ生ス

一 裁判費用ノ支拂ノ猶豫

二 執達吏及裁判所ニ於テ附添ヲ命シタル辯護士ノ報酬及立替金ノ支拂ノ猶豫

三 訴訟費用ノ擔保ノ免除

第百二十二條 訴訟上ノ救助ヲ受ケタル者カ訴訟費用ノ支拂ヲ爲ス資力ヲ有スルコト判明シ又ハ之ヲ有スルニ至リタルトキハ訴訟記録ノ存スル裁判所ハ利害關係人ノ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ何時ニテモ救助ヲ取消シ猶豫シタル訴訟費用ノ支拂ヲ命スルコトヲ得

第百二十三條 訴訟上ノ救助ヲ受ケタル者ニ支拂ヲ猶豫シタル費用ハ其ノ負擔ヲ命セラレタル相手方ヨリ直接ニ之ヲ取立ツルコトヲ得此ノ場合ニ於テ辯護士又ハ執達吏ハ訴訟上ノ救助ヲ受ケタル者ノ有スル債務名義ニ依リ報酬及立替金ニ付費用額ヲ定ムル申立及強制執行ヲ爲スコトヲ得

辯護士又ハ執達吏ハ報酬及立替金ニ付當事者ニ代リ第百三條又ハ第百四條ノ裁判ヲ求ムル申立ヲ爲スコトヲ得

第百二十四條 本節ニ規定スル裁判ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第四章 訴訟手續

第一節 口頭辯論

第百二十五條 當事者ハ訴訟ニ付裁判所ニ於テ口頭辯論ヲ爲スコトヲ要ス但シ決定ヲ以テ完結スヘキ事件ニ付テハ裁判所口頭辯論ヲ爲スヘキカ否ヲ定ム

前項但書ノ規定ニ依リテ口頭辯論ヲ爲ササル場合ニ於テハ裁判所ハ當事者ヲ審訊スルコトヲ得

前二項ノ規定ハ別段ノ規定アル場合ニハ之ヲ適用セス

第百二十六條 口頭辯論ハ裁判長之ヲ指揮ス

裁判長ハ發言ヲ許シ又ハ其ノ命ニ從ハサル者ニ發言ヲ禁スルコトヲ得

第百二十七條 裁判長ハ訴訟關係ヲ明瞭ナラシムル爲事實及法律上ノ事項ニ關シ當事者ニ對シテ問ヲ發シ又ハ立證ヲ促スコトヲ得

陪席判事ハ裁判長ニ告ケテ前項ニ規定スル處置ヲ爲スコトヲ得

當事者ハ裁判長ニ對シ必要ナル發問ヲ求ムルコトヲ得

第百二十八條 裁判長ハ前條ノ規定ニ依リテ當事者ヲシテ釋明セシムヘキ事項ヲ指示シ口頭辯論期日前準備ヲ爲スヘキコトヲ命スルコトヲ得

第百二十九條 當事者カ辯論ノ指揮ニ關スル裁判長ノ命又ハ第百二十七條若ハ前條ノ規定ニ依ル裁判長若ハ陪席判事ノ處置ニ對シ異議ヲ述ヘタルトキハ裁判所決定ヲ以テ其ノ異議ニ付裁判ヲ爲ス

第百三十條 受命判事ヲシテ其ノ職務ヲ行ハシムヘキ場合ニ於テハ裁判長

其ノ判事ヲ指定ス

裁判所ノ爲ス囑託ハ別段ノ規定アル場合ヲ除クノ外裁判長之ヲ爲ス

第三百三十一條 裁判所ハ訴訟關係ヲ明瞭ナラシムル爲左ノ處分ヲ爲スコトヲ得

一 當事者本人又ハ其ノ法定代理人ノ出頭ヲ命スルコト

二 訴訟書類又ハ訴訟ニ於テ引用シタル文書其ノ他ノ物件ニシテ當事者ノ所持スルモノヲ提出セシムルコト

三 當事者又ハ第三者ノ提出シタル文書其ノ他ノ物件ヲ裁判所ニ留置クコト

四 檢證ヲ爲シ又ハ鑑定ヲ命スルコト

五 必要ナル調査ヲ囑託スルコト

前項ニ規定スル檢證、鑑定及調査ノ囑託ニ付テハ證據調ニ關スル規定ヲ準用ス

第三百三十二條 裁判所ハ口頭辯論ノ制限、分離若ハ併合ヲ命シ又ハ其ノ命ヲ取消スコトヲ得

第三百三十三條 裁判所ハ終結シタル口頭辯論ノ再開ヲ命スルコトヲ得

第三百三十四條 辯論ニ與ル者カ日本語ニ通セサルトキ又ハ聾者ハ啞ナルトキハ通事ヲ立會ハシム但シ聾者又ハ啞者ニハ文字ヲ以テ問ヒ又ハ陳述ヲ爲サシムルコトヲ得

鑑定人ニ關スル規定ハ通事ニ之ヲ準用ス

第三百三十五條 裁判所ハ訴訟關係ヲ明瞭ナラシムル爲必要ナル陳述ヲ爲スコト能ハサル當事者、代理人又ハ輔佐人ノ陳述ヲ禁シ辯論續行ノ爲新期日ヲ定ムルコトヲ得

前項ノ規定ニ依リテ陳述ヲ禁シタル場合ニ於テ必要アリト認ムルトキハ裁判所ハ辯護士ノ附添ヲ命スルコトヲ得

訴訟代理人ノ陳述ヲ禁シ又ハ辯護士ノ附添ヲ命シタルトキハ本人ニ其ノ旨ヲ通知スルコトヲ要ス

第三百三十六條 裁判所ハ訴訟ノ如何ナル程度ニ在ルヲ問ハス和解ヲ試ミ又ハ受命判事若ハ受託判事ヲシテ之ヲ試シシムルコトヲ得

裁判所又ハ受命判事若ハ受託判事ハ和解ノ爲當事者本人又ハ其ノ法定代理人ノ出頭ヲ命スルコトヲ得

第三百三十七條 攻撃又ハ防禦ノ方法ハ別段ノ規定アル場合ヲ除クノ外口頭辯論ノ終結ニ至ル迄之ヲ提出スルコトヲ得

第三百三十八條 原告又ハ被告カ最初ニ爲スヘキ口頭辯論ノ期日ニ出頭セス又ハ出頭スルモ本案ノ辯論ヲ爲ササルトキハ其ノ者ノ提出シタル訴狀、答辯書其ノ他ノ準備書面ニ記載シタル事項ハ之ヲ陳述シタルモノト看做シ出頭シタル相手方ニ辯論ヲ命スルコトヲ得

第三百三十九條 當事者カ故意又ハ重大ナル過失ニ因リ時機ニ後レテ提出シタル攻撃又ハ防禦ノ方法ハ之カ爲訴訟ノ完結ヲ遅延セシムヘキモノト認メタルトキハ裁判所ハ決定ヲ以テ之ヲ却下スルコトヲ得

攻撃又ハ防禦ノ方法ニシテ其ノ趣旨明瞭ナラサルモノニ付當事者カ必要ナル釋明ヲ爲サス又ハ釋明ヲ爲スヘキ期日ニ出頭セサルトキ亦前項ニ同シ

第四百十條 當事者カ口頭辯論ニ於テ相手方ノ主張シタル事實ヲ明ニ争ハサルトキハ其ノ事實ヲ自白シタルモノト看做ス但シ辯論ノ全趣旨ニ依リ其ノ事實ヲ争ヒタルモノト認ムヘキ場合ハ此ノ限ニ在ラス

相手方ノ主張シタル事實ヲ知ラサル旨ノ陳述ヲ爲シタル者ハ其ノ事實ヲ争ヒタルモノト推定ス

第四百十一條 當事者カ訴訟手續ニ關スル規定ノ違背ヲ知り又ハ之ヲ知ルコトヲ得ヘカリシ場合ニ於テ遲滞ナク異議ヲ述ヘサルトキハ之ヲ述フル權利ヲ失フ但シ拋棄スルコトヲ得サルモノハ此ノ限ニ在ラス

第四百十二條 口頭辯論ニ付テハ裁判所書記期日毎ニ調書ヲ作ルコトヲ要ス

第四百十三條 調書ニハ左ノ事項ヲ記載シ裁判長及裁判所書記之ニ署名捺印シ裁判長支障アルトキハ陪席判事其ノ席次ニ從ヒ順次之ニ代リテ署名捺印シ且其ノ事由ヲ記載スルコトヲ要ス但シ判事皆支障アルトキハ書記其ノ旨ヲ記載スルヲ以テ足ル

一 事件ノ表示

二 判事及裁判所書記ノ氏名

三 立會ヒタル檢事ノ氏名

四 出頭シタル當事者、代理人、輔佐人及通事並闕席シタル當事者ノ氏名

五 辯論ノ場所及年月日

六 辯論ヲ公開シタルコト又ハ公開セサル場合ニ於テハ其ノ理由

第四百四十四條 調書ニハ辯論ノ要領ヲ記載シ殊ニ左ノ事項ヲ明確ニスルコトヲ要ス

一 和解、認諾、拋棄、取下及自白

二 證人、鑑定人ノ宣誓及陳述

三 檢證ノ結果

四 書面ニ作ラサル裁判

五 裁判ノ言渡

第四百四十五條 調書ニハ書面、寫真其ノ他裁判所ニ於テ適當ト認ムルモノヲ引用シ訴訟記録ニ添附シテ之ヲ調書ノ一部ト爲スコトヲ得

第四百四十六條 調書ノ記載ハ申立ニ因リ法廷ニ於テ關係人ニ之ヲ讀聞カセ又ハ閱覽セシメ且調書ニ其ノ旨ヲ記載スルコトヲ要ス

調書ノ記載ニ付關係人カ異議ヲ述ヘタルトキハ調書ニ其ノ趣旨ヲ記載スルコトヲ要ス

第四百四十七條 口頭辯論ノ方式ニ關スル規定ノ遵守ハ調書ニ依リテノミ之ヲ證スルコトヲ得但シ調書カ滅失シタルトキハ此ノ限ニ在ラス

第四百四十八條 裁判所必要アリト認ムルトキハ速記者ヲシテ口頭辯論ニ於ケル陳述ノ全部又ハ一部ヲ筆記セシムルコトヲ得

第四百四十九條 第四百四十二條乃至前條ノ規定ハ受命判事又ハ受託判事ノ審問及證據調ニ之ヲ準用ス

第五百十條 申立其ノ他ノ申述ハ別段ノ規定アル場合ヲ除クノ外書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

口頭ヲ以テ申述ヲ爲スニハ裁判所書記ノ面前ニ於テ陳述ヲ爲スコトヲ要ス

前項ノ場合ニ於テハ書記調書ヲ作り之ニ署名捺印スルコトヲ要ス

第五百十一條 當事者ハ訴訟記録ノ閱覽若ハ謄寫又ハ其ノ正本、謄本、抄本若ハ訴訟ニ關スル事項ノ證明書ノ交付ヲ裁判所書記ニ請求スルコトヲ得利害關係ヲ疏明シタル第三者亦同シ

訴訟記録ノ正本、謄本又ハ抄本ニハ其ノ正本、謄本又ハ抄本ナルコトヲ記載シ書記之ニ署名捺印シ且裁判所ノ印ヲ押捺スルコトヲ要ス

第二節 期日及期間

第五百十二條 期日ハ裁判長之ヲ定ム

受命判事又ハ受託判事ノ審問ノ期日ハ其ノ判事之ヲ定ム

期日ノ指定ハ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ之ヲ爲ス

第五百十三條 期日ハ已ムコトヲ得サル場合ニ限り日曜日其ノ他ノ一般ノ休日ニ之ヲ定ムルコトヲ得

第五百十四條 期日ニ於ケル呼出ハ呼出狀ヲ送達シテ之ヲ爲ス但シ當該事件ニ付頭シタル者ニ對シテハ期日ヲ告知スルヲ以テ足ル

第五百十五條 期日ハ事件ノ呼上ヲ以テ之ヲ開始ス

第五百十六條 期間ノ計算ハ民法ニ從フ

期間ノ末日カ日曜日其ノ他ノ一般ノ休日ニ當ルトキハ期間ハ其ノ翌日ヲ以テ滿了ス

第五百十七條 期間ヲ定ムル裁判ニ於テ始期ヲ定メサルトキハ其ノ期間ハ裁判カ效力ヲ生シタル時ヨリ進行ヲ始ム

第五百十八條 裁判所ハ法定期間又ハ其ノ定メタル期間ヲ伸長シ又ハ之ヲ短縮スルコトヲ得但シ不變期間ハ此ノ限ニ在ラス

不變期間ニ付テハ裁判所ハ遠隔ノ地ニ住所又ハ居所ヲ有スル者ノ爲附加期間ヲ定ムルコトヲ得

裁判長、受命判事又ハ受託判事ハ其ノ定メタル期間ヲ伸長シ又ハ之ヲ短縮スルコトヲ得

第五百十九條 當事者カ其ノ責ニ歸スヘカラサル事由ニ因リ不變期間ヲ遵守スルコト能ハサリシ場合ニ於テハ其ノ事由ノ止ミタル後一週間内ニ限り懈怠シタル訴訟行爲ノ追完ヲ爲スコトヲ得此ノ期間ニ付テハ前條ノ規定ヲ適用セス

第三節 送達

第六十條 送達ハ別段ノ規定アル場合ヲ除クノ外職權ヲ以テ之ヲ爲ス

第六十一條 送達ニ關スル事務ハ裁判所書記之ヲ取扱フ

前項ノ事務ノ取扱ハ送達地ノ區裁判所ノ書記ニ之ヲ囑託スルコトヲ得

第六十二條 送達ハ執達吏又ハ郵便ニ依リ之ヲ爲ス

郵便ニ依ル送達ニ在リテハ郵便集配人ヲ以テ送達ヲ爲ス吏員トス

第六十三條 當該事件ニ付頭シタル者ニ對シテハ裁判所書記自ラ送達ヲ爲スコトヲ得

第六十四條 送達ハ別段ノ規定アル場合ヲ除クノ外送達ヲ受クヘキ者ニ

送達スヘキ書類ノ謄本ヲ交付シテ之ヲ爲ス

送達スヘキ書類ノ提出ニ代ヘ調書ヲ作リタルトキハ其ノ調書ノ謄本又ハ

抄本ヲ交付シテ送達ヲ爲ス

第六十五條 訴訟無能力者ニ對スル送達ハ其ノ法定代理人ニ之ヲ爲ス

第六十六條 數人カ共同シテ代理權ヲ行フヘキ場合ニ於テハ送達ハ其ノ

一人ニ之ヲ爲スヲ以テ足ル

第六十七條 軍專用ノ廳舎又ハ艦船ニ屬スル者ニ對スル送達ハ其ノ廳舎

又ハ艦船ノ長ニ之ヲ爲ス

第六十八條 在監者ニ對スル送達ハ監獄ノ長ニ之ヲ爲ス

第六十九條 送達ハ之ヲ受クヘキ者ノ住所、居所、營業所又ハ事務所ニ

於テ之ヲ爲ス但シ法定代理人ニ對スル送達ハ本人ノ營業所又ハ事務所ニ

於テモ之ヲ爲スコトヲ得

送達ヲ受クヘキ者カ日本ニ住所、居所、營業所又ハ事務所ヲ有スルコト

明ナラサルトキハ送達ハ其ノ者ニ出會ヒタル場所ニ於テ之ヲ爲スコトヲ

得住所、居所、營業所又ハ事務所ヲ有スル者カ送達ヲ受クルコトヲ拒マ

サルトキ亦同シ

第七十條 當事者、法定代理人又ハ訴訟代理人ハ訴訟ノ繫屬スル裁判所

ノ所在地ニ於テ送達ヲ受クヘキ場所及送達受取人ヲ定メ之ヲ届出ツルコ

トヲ得

裁判所ノ所在地ニ住所、居所、營業所又ハ事務所ヲ有スルコト明ナラサ

ル場合ニ於テ送達ヲ受クヘキ者カ前項ノ届出ヲ爲ササルトキハ其ノ者ニ

對シテ送達スヘキ書類ハ前條第一項ノ規定ニ依リ送達スヘキ場所ニ宛テ

郵便ニ付シテ之ヲ發送スルコトヲ得

第七十一條 送達ヲ爲スヘキ場所ニ於テ送達ヲ受クヘキ者ニ出會ハサル

トキハ事務員、雇人又ハ同居者ニシテ事理ヲ辨識スルニ足ルヘキ知能ヲ

具フル者ニ書類ヲ交付スルコトヲ得

前項ニ掲クル者其ノ他書類ノ交付ヲ受クヘキ者カ正當ノ事由ナクシテ之

ヲ受クルコトヲ拒ミタルトキハ送達ヲ爲スヘキ場所ニ書類ヲ差置クコト

ヲ得

第七十二條 前條ノ規定ニ依リテ送達ヲ爲スコト能ハサル場合ニ於テハ

裁判所書記書類ヲ郵便ニ付シテ之ヲ發送スルコトヲ得

第七十三條 第七十條第二項又ハ前條ノ規定ニ依リテ書類ヲ郵便ニ付

シテ發送シタル場合ニ於テハ其ノ發送ノ時ニ於テ送達アリタルモノト看做ス

第七十四條 日曜日其ノ他ノ一般ノ休日又ハ日出前日没後ニ於テ執達吏

ニ依ル送達ヲ爲スニハ裁判長ノ許可アルコトヲ要ス

前項ノ許可アリタルトキハ裁判所書記ハ送達スヘキ書類ニ其ノ旨ヲ附記

スルコトヲ要ス

前二項ノ規定ニ違背スル送達ハ書類ノ交付ヲ受クヘキ者カ之ヲ受取リタ

ル場合ニ限り其ノ效力ヲ有ス

第七十五條 外國ニ於テ爲スヘキ送達ハ裁判長其ノ國ノ管轄官廳又ハ其

ノ國ニ駐在スル日本ノ大使、公使若ハ領事ニ囑託シテ之ヲ爲ス

第七十六條 出陣ノ軍隊若ハ外國駐在ノ軍隊ニ屬スル者又ハ役務ニ服ス

ル艦船ノ乗組員ニ對スル送達ハ裁判長上班司令官廳ニ囑託シテ之ヲ爲ス

前項ノ送達ニ付テハ第六十七條ノ規定ヲ準用ス

第七十七條 送達ヲ爲シタル吏員ハ書面ヲ作り送達ニ關スル事項ヲ記載

シ之ヲ裁判所ニ提出スルコトヲ要ス

第七十八條 當事者ノ住所、居所其ノ他送達ヲ爲スヘキ場所カ知レサル

場合又ハ外國ニ於テ爲スヘキ送達ニ付第七十五條ノ規定ニ依ルコト能

ハス若ハ之ニ依ルモ其ノ效ナシト認ムヘキ場合ニ於テハ申立ニ因リ裁判

長ノ許可ヲ得テ公示送達ヲ爲スコトヲ得

同一ノ當事者ニ對スル爾後ノ公示送達ハ職權ヲ以テ之ヲ爲ス

第七十九條 公示送達ハ裁判所書記送達スヘキ書類ヲ保管シ何時ニテモ

送達ヲ受クヘキ者ニ交付スヘキ旨ヲ裁判所ノ揭示場ニ揭示シテ之ヲ爲ス

但シ呼出狀ノ送達ハ呼出狀ヲ揭示場ニ貼附シテ之ヲ爲ス

裁判所ハ公示送達アリタルコトヲ官報又ハ新聞紙ニ掲載スヘキコトヲ命

スルコトヲ得但シ外國ニ於テ爲スヘキ送達ニ付テハ公示送達アリタルコ

トヲ郵便ニ付シテ通知スルコトヲ得

第八十條 公示送達ハ前條第一項ノ規定ニ依ル揭示ヲ始メ又ハ貼附ヲ爲

シタル日ヨリ二週間ヲ經過スルニ因リテ其ノ效力ヲ生ス但シ第七十八

條第二項ノ公示送達ハ揭示ヲ始メ又ハ貼附ヲ爲シタル日ノ翌日ニ於テ其

ノ效力ヲ生ス

前項ノ期間ハ之ヲ短縮スルコトヲ得ス
第八十一條 送達ニ關スル裁判長ノ權限ハ受命判事、受託判事及送達地ノ區裁判所ノ判事亦之ヲ有ス

第四節 裁判

第八十二條 訴訟カ裁判ヲ爲スニ熟スルトキハ裁判所ハ終局判決ヲ爲ス
第八十三條 訴訟ノ一部カ裁判ヲ爲スニ熟スルトキハ裁判所ハ其ノ一部ニ付終局判決ヲ爲スコトヲ得

前項ノ規定ハ口頭辯論ノ併合ヲ命シタル數個ノ訴訟中其ノ一カ裁判ヲ爲スニ熟スル場合及本訴又ハ反訴カ裁判ヲ爲スニ熟スル場合ニ之ヲ準用ス
第八十四條 獨立シタル攻撃又ハ防禦ノ方法其ノ他中間ノ争ニ付裁判ヲ爲スニ熟スルトキハ裁判所ハ中間判決ヲ爲スコトヲ得請求ノ原因及數額ニ付争アル場合ニ於テ其ノ原因ニ付亦同シ

第八十五條 裁判所ハ判決ヲ爲スニ當リ其ノ爲シタル口頭辯論ノ全趣旨及證據調ノ結果ヲ斟酌シ自由ナル心證ニ依リ事實上ノ主張ヲ眞實ト認ムヘキカ否カラ判斷ス
第八十六條 裁判所ハ當事者ノ申立テサル事項ニ付判決ヲ爲スコトヲ得ス

第八十七條 判決ハ其ノ基本タル口頭辯論ニ關與シタル判事之ヲ爲ス
判事ノ更迭アル場合ニ於テハ當事者ハ從前ノ口頭辯論ノ結果ヲ陳述スルコトヲ要ス

第八十八條 判決ハ言渡ニ因リテ其ノ效力ヲ生ス
第八十九條 判決ノ言渡ハ裁判長主文ヲ朗讀シテ之ヲ爲ス
裁判長ハ相當ト認ムルトキハ判決ノ理由ヲ朗讀シ又ハ口頭ヲ以テ其ノ要領ヲ告クルコトヲ得

第九十條 判決ノ言渡ハ口頭辯論終結ノ日ヨリ一週内ニ之ヲ爲ス
判決ノ言渡ハ當事者カ在廷セサル場合ニ於テモ之ヲ爲スコトヲ得

第九十一條 判決ニハ左ノ事項ヲ記載シ判決ヲ爲シタル判事之ニ署名捺印スルコトヲ要ス

- 一 主文
- 二 事實及争點
- 三 理由

四 當事者及法定代理人
五 裁判所

事實及争點ノ記載ハ口頭辯論ニ於ケル當事者ノ陳述ニ基キ要領ヲ摘示シテ之ヲ爲スコトヲ要ス
判事判決ニ署名捺印スルニ支障アルトキハ他ノ判事判決ニ其ノ事由ヲ記載シテ署名捺印スルコトヲ要ス

第九十二條 判決ハ言渡ノ日ヨリ一週内ニ之ヲ裁判所書記ニ交付シ書記ハ言渡及交付ノ日ヲ附記シ之ニ捺印スルコトヲ要ス
第九十三條 判決ハ當事者ニ之ヲ送達スルコトヲ要ス
判決ノ送達ハ正本ヲ以テ之ヲ爲ス

第九十四條 判決ニ違算、書損其ノ他之ニ類スル明白ナル誤謬アルトキハ裁判所ハ何時ニテモ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ更正決定ヲ爲スコトヲ得但シ判決ノ主文又ハ理由ニ影響ヲ及ホスヘキ場合ニ限ル
更正決定ハ判決ノ原本及正本ニ之ヲ附記スルコトヲ要ス但シ正本ニ附記スルコト能ハサルトキハ決定ノ正本ヲ作り之ヲ當事者ニ送達スルコトヲ要ス

更正決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得但シ判決ニ對シ適法ノ控訴アリタルトキハ此ノ限ニ在ラス

第九十五條 裁判所カ請求ノ一部ニ付裁判ヲ脫漏シタルトキハ訴訟ハ其ノ請求ノ部分ニ付仍裁判所ニ繫屬ス
訴訟費用ノ裁判ヲ脫漏シタル場合ニ於テハ裁判所ハ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其ノ訴訟費用ニ付裁判ヲ爲ス此ノ場合ニ於テハ第四百四條ノ規定ヲ準用ス

前項ノ規定ニ依ル訴訟費用ノ裁判ハ本案判決ニ對シ適法ノ控訴アリタルトキハ其ノ效力ヲ失フ此ノ場合ニ於テハ控訴裁判所ハ訴訟ノ總費用ニ付裁判ヲ爲ス

第九十六條 財産權上ノ請求ニ關スル判決ニ付テハ裁判所ハ必要アリト認ムルトキハ職權ヲ以テ擔保ヲ供シ又ハ供セスシテ假執行ヲ爲スコトヲ得ヘキコトヲ宣言スルコトヲ得

裁判所ハ職權ヲ以テ擔保ヲ供シテ假執行ヲ免ルルコトヲ得ヘキコトヲ宣言スルコトヲ得

前二項ノ宣言ハ判決主文ニ之ヲ掲クルコトヲ要ス

第九十七條 第九十二條、第九十三條、第九十五條及第九十六條ノ規定ハ前條ノ擔保ニ之ヲ準用ス

第九十八條 假執行ノ宣言ハ其ノ效力ヲ失フ

渡ニ因リ變更ノ限度ニ於テ其ノ效力ヲ失フ

本案判決ヲ變更スル場合ニ於テハ裁判所ハ被告ノ申立ニ因リ其ノ判決ニ於テ假執行ノ宣言ニ基キ被告カ給付シタルモノノ返還及假執行ニ因リ又ハ之ヲ免ルル爲被告ノ受ケタル損害ノ賠償ヲ原告ニ命スルコトヲ要ス

假執行ノ宣言ノミヲ變更シタルトキハ後ニ本案判決ヲ變更スル判決ニ付前項ノ規定ヲ適用ス

第九十九條 確定判決ハ主文ニ包含スルモノニ限り既判力ヲ有ス

相殺ノ爲主張シタル請求ノ成立又ハ不成立ノ判斷ハ相殺ヲ以テ對抗シタル額ニ付既判力ヲ有ス

第二百條 外國裁判所ノ確定判決ハ左ノ條件ヲ具備スル場合ニ限り其ノ效力ヲ有ス

一 法令又ハ條約ニ於テ外國裁判所ノ裁判權ヲ否認セサルコト

二 敗訴ノ被告カ日本人ナル場合ニ於テ公示送達ニ依ラスシテ訴訟ノ開始ニ必要ナル呼出若ハ命令ノ送達ヲ受ケタルコト又ハ之ヲ受ケサルモ應訴シタルコト

三 外國裁判所ノ判決カ日本ニ於ケル公ノ秩序又ハ善良ノ風俗ニ反セサルコト

四 相互ノ保證アルコト

第二百一條 確定判決ハ當事者、口頭辯論終結後ノ承繼人又ハ其ノ者ノ爲請求ノ目的物ヲ所持スル者ニ對シテ其ノ效力ヲ有ス

他人ノ爲原告又ハ被告ト爲リタル者ニ對スル確定判決ハ其ノ他人ニ對シテモ效力ヲ有ス

前二項ノ規定ハ假執行ノ宣言ニ之ヲ準用ス

第二百二條 不適法ナル訴ニシテ其ノ欠缺ヲ補正スルコト能ハサルモノナル場合ニ於テハ口頭辯論ヲ經スシテ判決ヲ以テ之ヲ却下スルコトヲ得

第二百三條 和解又ハ請求ノ拋棄若ハ認諾ヲ調書ニ記載シタルトキハ其ノ記載ハ確定判決ト同一ノ效力ヲ有ス

第二百四條 決定及命令ハ相當ト認ムル方法ヲ以テ之ヲ告知スルニ因リテ其ノ效力ヲ生ス

第二百五條 訴訟ノ指揮ニ關スル決定及命令ハ何時ニテモ之ヲ取消スコトヲ得

第二百六條 裁判所書記ノ處分ニ對スル異議ニ付テハ其ノ書記所屬ノ裁判所決定ヲ以テ裁判ヲ爲ス

第二百七條 決定及命令ニハ其ノ性質ニ反セサル限り判決ニ關スル規定ヲ準用ス

第五節 訴訟手續ノ中斷及中止

第二百八條 當事者カ死亡シタルトキハ訴訟手續ハ中斷ス此ノ場合ニ於テハ相續人、相續財產管理人其ノ他法令ニ依リ訴訟ヲ續行スヘキ者ハ訴訟手續ヲ受繼クコトヲ要ス

相續人ハ相續ノ拋棄ヲ爲スコトヲ得ル間ハ訴訟手續ヲ受繼クコトヲ得ス

第二百九條 當事者タル法人カ合併ニ因リテ消滅シタルトキハ訴訟手續ハ中斷ス此ノ場合ニ於テハ合併ニ因リテ設立シタル法人又ハ合併後存続スル法人ハ訴訟手續ヲ受繼クコトヲ要ス

前項ノ規定ハ合併ヲ以テ相手方ニ對抗スルコトヲ得サル場合ニハ之ヲ適用セス

第二百十條 當事者カ訴訟能力ヲ失ヒタルトキ又ハ其ノ法定代理人カ死亡シ若ハ代理權ヲ失ヒタルトキハ訴訟手續ハ中斷ス此ノ場合ニ於テハ法定代理人又ハ訴訟能力ヲ有スルニ至リタル當事者ハ訴訟手續ヲ受繼クコトヲ要ス

第二百十一條 受託者ノ信託ノ任務終了シタルトキハ訴訟手續ハ中斷ス此ノ場合ニ於テハ新受託者訴訟手續ヲ受繼クコトヲ要ス

第二百十二條 一定ノ資格ヲ有スル者カ自己ノ名ヲ以テ他人ノ爲訴訟ノ當事者タル場合ニ於テ其ノ資格ヲ喪失シタルトキハ訴訟手續ハ中斷ス此ノ場合ニ於テハ同一ノ資格ヲ有スル者訴訟手續ヲ受繼クコトヲ要ス當事者ノ死亡ニ因リ訴訟手續カ中斷シタル場合亦同シ

第四十七條ノ規定ニ依リテ原告又ハ被告ト爲ルヘキ者ヲ選定シタル訴訟ニ於テ其ノ選定セラレタル當事者ノ全員カ其ノ資格ヲ喪失シタルトキハ訴訟手續ハ中斷ス此ノ場合ニ於テハ選定ヲ爲シタル者ノ總員又ハ新ニ原

原告ハ被告トシテ選定セラレタル者ハ訴訟手續ヲ受繼クコトヲ要ス

第二百十三條 第二百八條第一項、第二百九條第一項及第二百十條乃至前條ノ規定ハ訴訟代理人アル間ハ之ヲ適用セス

第二百十四條 當事者カ破産ノ宣告ヲ受ケタルトキハ破産財團ニ關スル訴訟手續ハ中斷ス此ノ場合ニ於テ破産法ニ依ル受繼アル迄ニ破産手續ノ解止アリタルトキハ破産者ハ當然訴訟手續ヲ受繼ス

第二百十五條 破産法ニ依リテ破産財團ニ關スル訴訟手續ノ受繼アリタル後破産手續ノ解止アリタルトキハ訴訟手續ハ中斷ス此ノ場合ニ於テハ破産者ハ訴訟手續ヲ受繼クコトヲ要ス

第二百十六條 訴訟手續ノ受繼ハ相手方ニ於テモ亦之ヲ爲スコトヲ得

第二百十七條 訴訟手續受繼ノ申立アリタルトキハ裁判所ハ之ヲ相手方ニ通知スルコトヲ要ス

第二百十八條 訴訟手續受繼ノ申立ハ裁判所職權ヲ以テ之ヲ調査シ理由ナシト認メタルトキハ決定ヲ以テ之ヲ却下スルコトヲ要ス

裁判ノ送達後中斷シタル訴訟手續ノ受繼ニ付テハ其ノ裁判ヲ爲シタル裁判所裁判ヲ爲スコトヲ要ス

第二百十九條 裁判所ハ當事者カ訴訟手續ノ受繼ヲ爲ササル場合ニ於テモ職權ヲ以テ其ノ續行ヲ命スルコトヲ得

第二百二十條 天災其ノ他ノ事故ニ因リテ裁判所カ職務ヲ行フコト能ハサルトキハ訴訟手續ハ其ノ事故ノ止ム迄中止ス

第二百二十一條 當事者カ不定期間ノ故障ニ因リ訴訟手續ヲ續行スルコト能ハサルトキハ裁判所ハ決定ヲ以テ其ノ中止ヲ命スルコトヲ得

裁判所ハ前項ノ決定ヲ取消スコトヲ得

第二百二十二條 判決ノ言渡ハ訴訟手續ノ中斷中ト雖之ヲ爲スコトヲ得

訴訟手續ノ中斷又ハ中止ハ期間ノ進行ヲ止メ訴訟手續ノ受繼ノ通知又ハ續行ノ時ヨリ更ニ全期間ノ進行ヲ始ム

第二編 第一審ノ訴訟手續

第一章 地方裁判所ノ訴訟手續

第一節 訴

第二百二十三條 訴ノ提起ハ訴狀ヲ裁判所ニ提出シテ之ヲ爲スコトヲ要ス

第二百二十四條 訴狀ニハ當事者、法定代理人並請求ノ趣旨及原因ヲ記載

スルコトヲ要ス

準備書面ニ關スル規定ハ訴狀ニ之ヲ準用ス

第二百二十五條 確認ノ訴ハ法律關係ヲ證スル書面ノ真否ヲ確定スル爲ニモ之ヲ提起スルコトヲ得

第二百二十六條 將來ノ給付ヲ求ムル訴ハ豫メ其ノ請求ヲ爲ス必要アル場合ニ限り之ヲ提起スルコトヲ得

第二百二十七條 數個ノ請求ハ同種ノ訴訟手續ニ依ル場合ニ限り一ノ訴ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

第二百二十八條 訴狀カ第二百二十四條第一項ノ規定ニ違背スル場合ニ於テハ裁判長ハ相當ノ期間ヲ定メ其ノ期間内ニ欠缺ヲ補正スヘキコトヲ命スルコトヲ要ス法律ノ規定ニ從ヒ訴狀ニ印紙ヲ貼用セサル場合亦同シ

原告カ欠缺ノ補正ヲ爲ササルトキハ裁判長ハ命令ヲ以テ訴狀ヲ却下スルコトヲ要ス

前項ノ命令ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

抗告狀ニハ却下セラレタル訴狀ヲ添附スルコトヲ要ス

第二百二十九條 訴狀ハ之ヲ被告ニ送達スルコトヲ要ス

前條ノ規定ハ訴狀ノ送達ヲ爲スコト能ハサル場合ニ之ヲ準用ス

第二百三十條 訴ノ提起アリタルトキハ裁判長ハ口頭辯論ノ期日ヲ定メ當事者ヲ呼出スコトヲ要ス

第二百三十一條 裁判所ニ繫屬スル事件ニ付テハ當事者ハ更ニ訴ヲ提起スルコトヲ得ス

第二百三十二條 原告ハ請求ノ基礎ニ變更ナキ限リ口頭辯論ノ終結ニ至ル迄請求又ハ請求ノ原因ヲ變更スルコトヲ得但シ之ニ因リ著ク訴訟手續ヲ遲滯セシムヘキ場合ハ此ノ限ニ在ラス

請求ノ變更ハ書面ニ依リテ之ヲ爲スコトヲ要ス

前項ノ書面ハ之ヲ相手方ニ送達スルコトヲ要ス

第二百三十三條 裁判所カ請求又ハ請求ノ原因ノ變更ヲ不當ナリト認ムルトキハ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其ノ變更ヲ許ササル旨ノ決定ヲ爲スコトヲ要ス

ヲ求ムルコトヲ得但シ其ノ確認ノ請求カ他ノ裁判所ノ管轄ニ專屬セサル
トキニ限ル

前項ノ規定ニ依ル請求ノ擴張ハ書面ニ依リテ之ヲ爲スコトヲ要ス
前項ノ書面ハ之ヲ相手方ニ送達スルコトヲ要ス

第二百三十五條 時効ノ中斷又ハ法律上ノ期間遵守ノ爲必要ナル裁判上ノ
請求ハ訴ヲ提起シタル時又ハ第二百三十二條第二項若ハ前條第二項ノ規

定ニ依リ書面ヲ裁判所ニ提出シタル時ニ於テ其ノ效力ヲ生ス
第二百三十六條 訴ハ判決ノ確定ニ至ル迄其ノ全部又ハ一部ヲ取下クルコ

トヲ得但シ相手方カ本案ニ付準備書面ヲ提出シ、準備手續ニ於テ申述ヲ
爲シ又ハ口頭辯論ヲ爲シタルトキハ訴ノ取下ニ付其ノ同意アルコトヲ要
ス

訴ノ取下ハ書面ニ依リテ之ヲ爲スコトヲ要ス但シ口頭辯論ニ於テ又ハ準備
手續中受命判事ノ面前ニ於テ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ妨ケス

訴狀送達ノ後ニ在リテハ取下ノ書面ハ之ヲ相手方ニ送達スルコトヲ要ス
第二百三十七條 訴訟ハ訴ノ取下アリタル部分ニ付テハ初ヨリ繫屬ナカリ
シモノト看做ス

本案ニ付終局判決アリタル後訴ヲ取下ケタル者ハ同一ノ訴ヲ提起スルコ
トヲ得ス

第二百三十八條 當事者雙方カ口頭辯論ノ期日ニ出頭セス又ハ辯論ヲ爲サ
スシテ退廷シタル場合ニ於テ六月内ニ期日指定ノ申立ヲ爲ササルトキハ
訴ノ取下アリタルモノト看做ス

第二百三十九條 被告ハ口頭辯論ノ終結ニ至ル迄本訴ノ繫屬スル裁判所ニ
反訴ヲ提起スルコトヲ得但シ其ノ目的タル請求カ他ノ裁判所ノ管轄ニ專
屬セサルトキ及本訴ノ目的タル請求又ハ防禦ノ方法ト牽連スルトキニ限
ル

第二百四十條 反訴ニ付テハ本訴ニ關スル規定ニ依ル

第二百四十一條 本訴ノ取下アリタルトキハ被告ハ原告ノ同意ヲ得スシテ
反訴ヲ取下クルコトヲ得

第二節 辯論ノ準備

第二百四十二條 口頭辯論ハ書面ヲ以テ之ヲ準備スルコトヲ要ス

第二百四十三條 準備書面ハ之ニ記載シタル事項ニ付相手方カ準備ヲ爲ス

ニ必要ナル期間ヲ存シ之ヲ裁判所ニ提出シ裁判所ハ之ヲ相手方ニ送達ス
ルコトヲ要ス

裁判長ハ準備書面ヲ提出スヘキ期間ヲ定ムルコトヲ得
第二百四十四條 準備書面ニハ左ノ事項ヲ記載シ當事者又ハ代理人之ニ署
名捺印スルコトヲ要ス

一 當事者ノ氏名、名稱又ハ商號、職業及住所

二 代理人ノ氏名、職業及住所

三 事件ノ表示

四 攻撃又ハ防禦ノ方法

五 相手方ノ請求及攻撃又ハ防禦ノ方法ニ對スル陳述

六 附屬書類ノ表示

七 年月日

八 裁判所ノ表示

第二百四十五條 當事者ノ所持スル文書ニシテ準備書面ニ引用シタルモノ
ハ準備書面ノ各通ニ其ノ謄本ヲ添附スルコトヲ要ス

文書ノ一部ノミヲ必要トスルトキハ其ノ抄本ヲ添附シ文書カ大部ナルト
キハ其ノ文書ヲ表示スルヲ以テ足ル

第二百四十六條 前條ノ文書ハ相手方ノ求ニ因リ其ノ原本ヲ閱覽セシムル
コトヲ要ス

第二百四十七條 準備書面ニ記載セサル事實ハ相手方カ在廷セサルトキハ
口頭辯論ニ於テ之ヲ主張スルコトヲ得ス

第二百四十八條 外國語ヲ以テ作りタル文書ニハ其ノ譯文ヲ添附スルコト
ヲ要ス

第二百四十九條 訴訟ニ付テハ受命判事ニ依リ口頭辯論ノ準備手續ヲ爲ス
コトヲ要ス但シ裁判所相當ト認ムルトキハ直ニ辯論ヲ命シ又ハ訴訟ノ一
部若ハ或争點ノミニ付準備手續ヲ命スルコトヲ得

第二百五十條 準備手續ニ於テハ調書ヲ作り當事者ノ陳述ニ基キ第二百四
十四條第四號及第五號ニ掲クル事項ヲ記載シ殊ニ證據ニ付テハ其ノ申出
ヲ明確ニスルコトヲ要ス

受命判事相當ト認ムルトキハ準備書面ヲ以テ前項ノ陳述及調書ニ代フル
コトヲ得

第二百五十一條 當事者ノ一方カ期日ニ出頭セサルトキハ前條ノ調書ノ謄本ヲ之ニ送達シ新期日ヲ定メ當事者雙方ヲ呼出スコトヲ得

第二百五十二條 受命判事ハ當事者ヲシテ準備書面ヲ提出セシムルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ第二百四十三條ノ規定ヲ準用ス

第二百五十三條 當事者カ期日ニ出頭セス又ハ前條ノ規定ニ依リ受命判事ノ定メタル期間内ニ準備書面ヲ提出セサルトキハ受命判事ハ準備手續ヲ終結スルコトヲ得

第二百五十四條 當事者ハ口頭辯論ニ於テ準備手續ノ結果ヲ陳述スルコトヲ要ス

第二百五十五條 調書又ハ之ニ代ルヘキ準備書面ニ記載セサル事項ハ口頭辯論ニ於テ之ヲ主張スルコトヲ得但シ其ノ事項カ裁判所職權ヲ以テ調査ヘキモノナルトキ、著ク訴訟ヲ遲滞セシメサルトキ又ハ重大ナル過失ナクシテ準備手續ニ於テ之ヲ提出スルコト能ハサリシコトヲ疏明シタルトキハ此ノ限ニ在ラス

前項但書ノ規定ハ第二百四十七條ノ規定ノ適用ヲ妨ケス
訴訟又ハ準備手續前ニ提出シタル準備書面ニ記載シタル事項ハ調書又ハ之ニ代ルヘキ準備書面ニ記載セサルモノト雖口頭辯論ニ於テ之ヲ主張スルコトヲ妨ケス

第二百五十六條 第二百二十六條乃至第二百二十九條、第三百十一條、第三百十三條乃至第四百十一條及第二百三十八條ノ規定ハ準備手續ニ之ヲ準用ス

第三節 證據

第一款 總則

第二百五十七條 裁判所ニ於テ當事者カ自白シタル事實及顯著ナル事實ハ之ヲ證スルコトヲ要セス

第二百五十八條 證據ノ申出ハ證スヘキ事實ヲ表示シテ之ヲ爲スコトヲ要ス

證據ノ申出ハ期日前ニ於テモ之ヲ爲スコトヲ得

第二百五十九條 當事者ノ申出テタル證據ニシテ裁判所ニ於テ不必要ト認ムルモノハ之ヲ取調フルコトヲ要セス

第二百六十條 證據調ニ付不定期間ノ障礙アルトキハ裁判所ハ證據調ヲ爲

ササルコトヲ得

第二百六十一條 裁判所ハ當事者ノ申出テタル證據ニ依リテ心證ヲ得ルコト能ハサルトキ其ノ他必要アリト認ムルトキハ職權ヲ以テ證據調ヲ爲スコトヲ得

第二百六十二條 裁判所ハ必要ナル調査ヲ官廳若ハ公署、外國ノ官廳若ハ公署又ハ法人ニ囑託スルコトヲ得

第二百六十三條 證據調ハ當事者カ期日ニ出頭セサル場合ニ於テモ之ヲ爲スコトヲ得

第二百六十四條 外國ニ於テ爲スヘキ證據調ハ其ノ國ノ管轄官廳又ハ其ノ國ニ駐在スル日本ノ大使、公使若ハ領事ニ之ヲ囑託シテ爲スコトヲ要ス
外國ニ於テ爲シタル證據調ハ其ノ國ノ法律ニ違背スルモ本法ニ違背セサルトキハ其ノ效力ヲ有ス

第二百六十五條 裁判所ハ相當ト認ムルトキハ裁判所外ニ於テ證據調ヲ爲スコトヲ得此ノ場合ニ於テハ部員ニ命シ又ハ區裁判所ニ囑託シテ證據調ヲ爲サシムルコトヲ得

受託判事カ他ノ區裁判所ニ於テ證據調ヲ爲スコトヲ相當ト認ムルトキハ更ニ證據調ノ囑託ヲ爲スコトヲ得此ノ場合ニ於テハ其ノ旨ヲ受託裁判所及當事者ニ通知スルコトヲ要ス

第二百六十六條 受託判事ハ證據調ニ關スル記錄ヲ受託裁判所ニ送付スルコトヲ要ス

第二百六十七條 疏明ハ即時ニ取調フルコトヲ得ヘキ證據ニ依リテ之ヲ爲スコトヲ要ス

裁判所ハ當事者若ハ法定代理人ヲシテ保證金ヲ供託セシメ又ハ其ノ主張ノ眞實ナルコトヲ宣誓セシメ之ヲ以テ疏明ニ代フルコトヲ得

第二百六十八條乃至第二百六十九條ノ規定ハ前項ノ宣誓ニ之ヲ準用ス

第二百六十八條 前條第二項ノ規定ニ依リテ保證金ヲ供託ヲ爲シタル當事者又ハ法定代理人カ虛偽ノ申述ヲ爲シタルトキハ裁判所決定ヲ以テ保證金ヲ沒取ス

第二百六十九條 第二百六十七條第二項ノ規定ニ依リテ宣誓ヲ爲シタル當事者又ハ法定代理人カ虛偽ノ申述ヲ爲シタルトキハ宣誓ヲ爲サシメタル裁判所決定ヲ以テ千圓以下ノ過料ニ處ス

第二百七十條 第二百六十八條及前條ノ決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第二款 證人訊問

第二百七十一條 裁判所ハ別段ノ規定アル場合ヲ除クノ外何人ト雖證人トシテ之ヲ訊問スルコトヲ得

第二百七十二條 官吏又ハ官吏タリシ者ヲ證人トシテ職務上ノ祕密ニ付訊問スル場合ニ於テハ裁判所ハ當該監督官廳ノ承認ヲ得ルコトヲ要ス

前項ノ規定ハ他ノ公務員ニ付之ヲ準用ス

第二百七十三條 國務大臣、宮内大臣、内大臣、樞密院議長、樞密院副議長、樞密顧問官、會計検査院長、元帥、參謀總長、海軍軍令部長、教育總監若ハ軍事參議官又ハ此等ノ職ニ在リタル者ヲ證人トシテ職務上ノ祕密ニ付訊問スル場合ニ於テハ裁判所ハ勅許ヲ得ルコトヲ要ス

第二百七十四條 貴族院若ハ衆議院ノ議員又ハ議員タリシ者ヲ證人トシテ職務上ノ祕密ニ付訊問スル場合ニ於テハ裁判所ハ其ノ院ノ承認ヲ得ルコトヲ要ス

第二百七十五條 證人訊問ノ申出ハ證人ヲ指定シテ之ヲ爲スコトヲ要ス

第二百七十六條 證人ノ呼出狀ニハ左ノ事項ヲ記載スルコトヲ要ス

一 當事者ノ表示

二 訊問事項ノ要領

三 出頭セサル場合ニ於ケル法律上ノ制裁

第二百七十七條 證人カ正當ノ事由ナクシテ出頭セサルトキハ裁判所ハ決定ヲ以テ之ニ因リテ生シタル訴訟費用ノ負擔ヲ命シ且五百圓以下ノ過料ニ處ス此ノ決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第二百七十八條 裁判所ハ正當ノ事由ナクシテ出頭セサル證人ノ勾引ヲ命スルコトヲ得

前項ノ勾引ニハ刑事訴訟法中勾引ニ關スル規定ヲ準用ス

第二百七十九條 左ノ場合ニ於テハ受命判事又ハ受託判事ヲシテ證人ノ訊問ヲ爲サシムルコトヲ得

一 證人カ受訴裁判所ニ出頭スル義務ナキトキ又ハ正當ノ事由ニ因リ出頭スルコト能ハサルトキ

二 證人カ受訴裁判所ニ出頭スルニ付不相當ノ費用又ハ時間ヲ要スルトキ

第二百八十條 證言カ證人又ハ左ニ掲クル者ノ刑事上ノ訴追又ハ處罰ヲ招ク虞アル事項ニ關スルトキハ證人ハ證言ヲ拒ムコトヲ得證言カ此等ノ者ノ恥辱ニ歸スヘキ事項ニ關スルトキ亦同シ

一 證人ノ配偶者、四親等内ノ血族若ハ三親等内ノ姻族又ハ證人ノ家ノ戶主但シ親族ニ付テハ親族關係カ止ミタル後亦同シ

二 證人ノ後見人又ハ證人ノ後見ヲ受クル者

三 證人カ主人トシテ仕フル者

第二百八十一條 左ノ場合ニ於テハ證人ハ證言ヲ拒ムコトヲ得

一 第二百七十二條乃至第二百七十四條ノ場合

二 醫師、齒科醫師、藥劑師、藥種商、產婆、辯護士、辨理士、辯護人、公證人、宗教又ハ禱祀ノ職ニ在ル者又ハ此等ノ職ニ在リタル者カ職務上知リタル事實ニシテ默秘スヘキモノニ付訊問ヲ受クルトキ

三 技術又ハ職業ノ祕密ニ關スル事項ニ付訊問ヲ受クルトキ

前項ノ規定ハ證人カ默秘ノ義務ヲ免セラレタル場合ニハ之ヲ適用セス

第二百八十二條 證言拒絶ノ理由ハ之ヲ疏明スルコトヲ要ス

第二百八十三條 第二百八十一條第一項第一號ノ場合ヲ除クノ外證言拒絶ノ當否ニ付テハ受訴裁判所當事者ヲ審訊シテ裁判ヲ爲ス

證言拒絶ニ關スル裁判ニ對シテハ當事者及證人ハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第二百八十四條 證言拒絶ヲ理由ナシトスル裁判確定シタル後證人カ故ナク證言ヲ拒ムトキハ第二百七十七條ノ規定ヲ準用ス

第二百八十五條 裁判長ハ證人ヲシテ訊問前宣誓ヲ爲サシムルコトヲ要ス但シ特別ノ事由アルトキハ訊問後之ヲ爲サシムルコトヲ得

第二百八十六條 宣誓ハ起立シテ嚴肅ニ之ヲ行フコトヲ要ス

第二百八十七條 裁判長ハ宣誓前宣誓ノ趣旨ヲ諭示シ且偽證ノ罰ヲ警告スルコトヲ要ス

第二百八十八條 宣誓ハ證人ヲシテ宣誓書ヲ朗讀セシメ且之ニ署名捺印セシメテ之ヲ爲ス證人宣誓書ヲ朗讀スルコト能ハサルトキハ裁判長代リテ之ヲ朗讀ス

宣誓書ニハ良心ニ從ヒ眞實ヲ述ヘ何事ヲモ默秘セス又何事ヲモ附加セサルコトヲ誓フ旨ヲ記載スルコトヲ要ス

第二百八十九條 左ニ掲クル者ヲ證人トシテ訊問スルニハ宣誓ヲ爲サシムルコトヲ得ス

一 十六年未滿ノ者

二 宣誓ノ趣旨ヲ理解スルコト能ハサル者

第二百九十條 第二百八十條ノ規定ニ該當スル證人ニシテ證言拒絶ノ權利ヲ行ハサル者ヲ訊問スルニハ宣誓ヲ爲サシメサルコトヲ得

第二百九十一條 證人カ自己又ハ第二百八十條ニ掲クル者ニ著キ利害關係アル事項ニ付訊問ヲ受クルトキハ宣誓ヲ拒ムコトヲ得

第二百九十二條 宣誓ヲ爲サシメスシテ證人ヲ訊問シタルトキハ其ノ旨及事由ヲ調書ニ記載スルコトヲ要ス

第二百九十三條 第二百七十七條、第二百八十二條及第二百八十三條ノ規定ハ證人カ宣誓ヲ拒ム場合ニ之ヲ準用ス

第二百九十四條 裁判長ハ必要アリト認ムルトキハ證人相互ノ對質ヲ命スルコトヲ得

第二百九十五條 裁判長ハ必要アリト認ムルトキハ證人ヲシテ文字ノ手記其ノ他必要ナル行爲ヲ爲サシムルコトヲ得

第二百九十六條 裁判長ハ必要アリト認ムルトキハ後ニ訊問スヘキ證人ニ一時退廷ヲ命スルコトヲ得

第二百九十七條 證人ハ書類ニ依リテ陳述ヲ爲スコトヲ得ス但シ裁判長ノ許可ヲ受ケタルトキハ此ノ限ニ在ラス

第二百九十八條 陪席判事ハ裁判長ニ告ケ證人ニ對シテ問ヲ發スルコトヲ得

第二百九十九條 當事者ハ裁判長ニ對シ必要ナル發問ヲ求メ又ハ其ノ許可ヲ得テ問ヲ發スルコトヲ得

當事者ハ發問ノ許否ニ付異議ヲ述フルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ裁判所異議ニ付裁判ヲ爲ス

第三百條 受命判事又ハ受託判事カ證人訊問ヲ爲ス場合ニ於テハ裁判所及裁判長ノ職務ハ其ノ判事之ヲ行フ但シ前條第二項ノ規定ニ依ル異議ノ裁判ハ受訴裁判所之ヲ爲ス

第三款 鑑定

第三百一條 鑑定ニハ別段ノ規定アル場合ヲ除クノ外前款ノ規定ヲ準用ス

第三百二條 鑑定ニ必要ナル學識經驗アル者ハ鑑定ヲ爲ス義務ヲ負フ

第二百八十條又ハ第二百九十一條ノ規定ニ依リテ證言又ハ宣誓ヲ拒ミ得ル者ト同一ノ地位ニ在ル者及第二百八十九條ニ掲クル者ハ鑑定人タルコトヲ得ス

第三百三條 鑑定人ハ之ヲ勾引スルコトヲ得ス

第三百四條 鑑定人ハ受訴裁判所、受命判事又ハ受託判事之ヲ指定ス

第三百五條 鑑定人ニ付誠實ニ鑑定ヲ爲スコトヲ妨クヘキ事情アルトキハ當事者ハ其ノ鑑定人カ鑑定事項ニ付陳述ヲ爲ス前之ヲ忌避スルコトヲ得

陳述ヲ爲シタルトキト雖其ノ後ニ忌避ノ原因ヲ生シ又ハ當事者カ其ノ原因アルコトヲ知リタルトキ亦同シ

第三百六條 忌避ノ申立ハ受訴裁判所、受命判事又ハ受託判事ニ之ヲ爲スコトヲ要ス

忌避ノ事由ハ之ヲ疏明スルコトヲ要ス

忌避ノ理由アリトスル決定ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス之ヲ理由ナシトスル決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第三百七條 宣誓書ニハ良心ニ從ヒ誠實ニ鑑定ヲ爲スコトヲ誓フ旨ヲ記載スルコトヲ要ス

第三百八條 裁判長ハ鑑定人ヲシテ書面又ハ口頭ヲ以テ共同ニテ又ハ各別ニ意見ヲ述ヘシムルコトヲ得

第三百九條 特別ノ學識經驗ニ依リテ知り得タル事實ニ關スル訊問ニ付テハ證人訊問ニ關スル規定ニ依ル

第三百十條 裁判所必要アリト認ムルトキハ官廳若ハ公署、外國ノ官廳若ハ公署又ハ相當ノ設備アル法人ニ鑑定ヲ囑託スルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ宣誓ニ關スル規定ヲ除クノ外前款ノ規定ヲ準用ス

前項ノ場合ニ於テ裁判所必要アリト認ムルトキハ官廳、公署又ハ法人ノ指定シタル者ヲシテ鑑定書ノ説明ヲ爲サシムルコトヲ得

第四款 書證

第三百十一條 書證ノ申出ハ文書ヲ提出シ又ハ之ヲ所持スル者ニ其ノ提出ヲ命セムコトヲ申立テ之ヲ爲スコトヲ要ス

第三百十二條 左ノ場合ニ於テハ文書ノ所持者ハ其ノ提出ヲ拒ムコトヲ得ス

一 當事者カ訴訟ニ於テ引用シタル文書ヲ自ラ所持スルトキ

二 舉證者カ文書ノ所持者ニ對シ其ノ引渡又ハ閱覽ヲ求ムルコトヲ得ル
トキ

三 文書カ舉證者ノ利益ノ爲ニ作成セラレ又ハ舉證者ト文書ノ所持者ト
ノ間ノ法律關係ニ付作成セラレタルトキ

第三百十三條 文書提出ノ申立ニハ左ノ事項ヲ明ニスルコトヲ要ス

一 文書ノ表示

二 文書ノ趣旨

三 文書ノ所持者

四 證スヘキ事實

五 文書提出ノ義務ノ原因

第三百十四條 裁判所カ文書提出ノ申立ヲ理由アリト認メタルトキハ決定
ヲ以テ文書ノ所持者ニ對シ其ノ提出ヲ命ス

第三百者ニ對シ文書ノ提出ヲ命スル場合ニ於テハ其ノ第三者ヲ審訊スルコ
トヲ要ス

第三百十五條 文書提出ノ申立ニ關スル決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコ
トヲ得

第三百十六條 當事者カ文書提出ノ命ニ從ハサルトキハ裁判所ハ文書ニ關
スル相手方ノ主張ヲ眞實ト認ムルコトヲ得

第三百十七條 當事者カ相手方ノ使用ヲ妨クル目的ヲ以テ提出ノ義務アル
文書ヲ毀滅シ其ノ他ノ之ヲ使用スルコト能ハサルニ至ラシメタルトキハ裁

判所ハ其ノ文書ニ關スル相手方ノ主張ヲ眞實ト認ムルコトヲ得

第三百十八條 第三者カ文書提出ノ命ニ從ハサルトキハ裁判所ハ決定ヲ以
テ五百圓以下ノ過料ニ處ス此ノ決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第三百十九條 書證ノ申出ハ第三百十一條ノ規定ニ拘ラス文書ノ所持者ニ
其ノ文書ノ送付ヲ囑託セムコトヲ申立テ之ヲ爲スコトヲ得但シ當事者カ

法令ニ依リテ文書ノ正本又ハ謄本ノ交付ヲ求ムルコトヲ得ル場合ハ此ノ
限ニ在ラス

第三百二十條 裁判所ハ必要アリト認ムルトキハ提出又ハ送付ニ係ル文書
ヲ留置クコトヲ得

第三百二十一條 第二百六十五條ノ規定ニ依リテ受命判事又ハ受託判事ヲ

シテ文書ニ付證據調ヲ爲サシムル場合ニ於テハ裁判所ハ受命判事又ハ受
託判事ノ調書ニ記載スヘキ事項ヲ定ムルコトヲ得

前項ノ調書ニハ文書ノ謄本又ハ抄本ヲ添附スルコトヲ要ス

第三百二十二條 文書ノ提出又ハ送付ハ原本、正本又ハ認證アル謄本ヲ以
テ之ヲ爲スコトヲ要ス

裁判所ハ前項ノ規定ニ拘ラス原本ノ提出ヲ命シ又ハ送付ヲ爲サシムルコ
トヲ得

裁判所ハ當事者ヲシテ其ノ引用シタル文書ノ謄本又ハ抄本ヲ提出セシム
ルコトヲ得

第三百二十三條 文書ハ其ノ方式及趣旨ニ依リ官吏其ノ他ノ公務員カ職務
上作成シタルモノト認ムヘキトキハ之ヲ眞正ナル公文書ト推定ス

公文書ノ眞否ニ付疑アルトキハ裁判所ハ職權ヲ以テ當該官廳又ハ公署ニ
問合ヲ爲スコトヲ得

第三百二十四條 前條ノ規定ハ外國ノ官廳又ハ公署ノ作成ニ係ルモノト認
ムヘキ文書ニ之ヲ準用ス

第三百二十五條 私文書ハ其ノ眞正ナルコトヲ證スルコトヲ要ス

第三百二十六條 私文書ハ本人又ハ其ノ代理人ノ署名又ハ捺印アルトキハ
之ヲ眞正ナルモノト推定ス

第三百二十七條 文書ノ眞否ハ筆跡又ハ印影ノ對照ニ依リテモ之ヲ證スル
コトヲ得

第三百二十八條 第三百十一條、第三百十四條乃至第三百十七條及第三百
十九條乃至第三百二十一條ノ規定ハ對照ノ用ニ供スヘキ筆跡又ハ印影ヲ

具フル文書其ノ他ノ物件ノ提出又ハ送付ニ之ヲ準用ス

第三者カ正當ノ事由ナクシテ前項ノ規定ニ依ル提出ノ命ニ從ハサルトキ
ハ裁判所ハ決定ヲ以テ五百圓以下ノ過料ニ處ス此ノ決定ニ對シテハ即時

抗告ヲ爲スコトヲ得

第三百二十九條 對照ニ適當ナル筆跡ナキトキハ裁判所ハ對照ノ用ニ供ス
ヘキ文字ノ手記ヲ相手方ニ命スルコトヲ得

相手方カ正當ノ事由ナクシテ前項ノ規定ニ依ル裁判所ノ命ニ從ハサルト
キハ裁判所ハ文書ノ眞否ニ關スル舉證者ノ主張ヲ眞實ト認ムルコトヲ得

書様ヲ變シテ手記シタルトキ亦同シ

第三百三十條 對照ノ用ニ供シタル書類ノ原本、謄本又ハ抄本ハ之ヲ調書ニ添附スルコトヲ要ス

第三百三十一條 當事者又ハ其ノ代理人カ故意又ハ重大ナル過失ニ因リ眞實ニ反シテ文書ノ眞正ヲ爭ヒタルトキハ裁判所決定ヲ以テ五百圓以下ノ過料ニ處ス此ノ決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

前項ノ場合ニ於テ文書ノ眞正ヲ爭ヒタル當事者又ハ代理人カ訴訟ノ繫屬中其ノ眞正ナルコトヲ認メタルトキハ裁判所ハ事情ニ依リ前項ノ決定ヲ取消スコトヲ得

第三百三十二條 本款ノ規定ハ證據ノ爲作リタル物件ニシテ文書ニ非サルモノニ之ヲ準用ス

第五款 檢證

第三百三十三條 檢證ノ申出ハ檢證ノ目的ヲ表示シテ之ヲ爲スコトヲ要ス

第三百三十四條 受命判事又ハ受託判事ハ檢證ヲ爲スニ當リ必要アリト認ムルトキハ鑑定ヲ命スルコトヲ得

第三百三十五條 第三百一十一條、第三百十四條乃至第三百十七條及第三百十九條乃至第三百二十一條ノ規定ハ檢證ノ目的ノ提示又ハ送付ニ之ヲ準用ス

第三者カ正當ノ事由ナクシテ前項ノ規定ニ依ル提示ノ命ニ從ハサルトキハ裁判所ハ決定ヲ以テ五百圓以下ノ過料ニ處ス此ノ決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第六款 當事者訊問

第三百三十六條 裁判所カ證據調ニ依リテ心證ヲ得ルコト能ハサルトキ其ノ他必要アリト認ムルトキハ職權ヲ以テ當事者本人ヲ訊問スルコトヲ得

此ノ場合ニ於テハ當事者ヲシテ宣誓ヲ爲サシムルコトヲ得

第三百三十七條 裁判長必要アリト認ムルトキハ當事者相互又ハ當事者ト證人トノ對質ヲ命スルコトヲ得

第三百三十八條 當事者カ正當ノ事由ナクシテ呼出ニ應セス又ハ宣誓若ハ陳述ヲ拒ミタルトキハ裁判所ハ訊問事項ニ關スル相手方ノ主張ヲ眞實ト認ムルコトヲ得

第三百三十九條 宣誓シタル當事者カ虛偽ノ陳述ヲ爲シタルトキハ裁判所決定ヲ以テ千圓以下ノ過料ニ處ス此ノ決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

トヲ得

第三百三十一條第二項ノ規定ハ前項ノ決定ニ之ヲ準用ス

第三百四十條 當事者ヲ訊問シタルトキハ其ノ陳述及宣誓ヲ爲サシメ又ハ爲サシメサルコトヲ調書ニ記載スルコトヲ要ス

第三百四十一條 第三百三十六條乃至前條ノ規定ハ訴訟ニ於テ當事者ヲ代表スル法定代理人ニ之ヲ準用ス但シ當事者本人ヲ訊問スルコトヲ妨ケス

第三百四十二條 第二百七十六條、第二百七十九條、第二百八十五條乃至第二百八十九條、第二百九十五條及第二百九十七條乃至第三百條ノ規定ハ本款ノ訊問ニ之ヲ準用ス

第七款 證據保全

第三百四十三條 裁判所ハ豫メ證據調ヲ爲スニ非サレハ其ノ證據ヲ使用スルニ困難ナル事情アリト認ムルトキハ申立ニ因リ本節ノ規定ニ從ヒ證據調ヲ爲スコトヲ得

第三百四十四條 證據保全ノ申立ハ訴訟ノ繫屬中ニ在リテハ其ノ證據ヲ使用スヘキ審級ノ裁判所ニ、其ノ提起前ニ在リテハ訊問ヲ受クヘキ者若ハ文書ヲ所持スル者ノ居所又ハ檢證物ノ所在地ヲ管轄スル區裁判所ニ之ヲ爲スコトヲ要ス

急迫ナル場合ニ於テハ訴ノ提起後ト雖前項ノ區裁判所ニ證據保全ノ申立ヲ爲スコトヲ得

第三百四十五條 證據保全ノ申立ニハ左ノ事項ヲ明ニスルコトヲ要ス

一 相手方ノ表示

二 證スヘキ事實

三 證據

四 證據保全ノ事由

證據保全ノ事由ハ之ヲ説明スルコトヲ要ス

第三百四十六條 證據保全ノ申立ハ相手方ヲ指定スルコト能ハサル場合ニ於テモ之ヲ爲スコトヲ得此ノ場合ニ於テハ裁判所ハ相手方ト爲ルヘキ者ノ爲ニ特別代理人ヲ選任スルコトヲ得

第三百四十七條 裁判所ハ必要アリト認ムルトキハ訴訟ノ繫屬中職權ヲ以テ證據保全ノ決定ヲ爲スコトヲ得

第三百四十八條 證據保全ノ決定ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス

第三百四十九條 證據調ノ期日ニハ申立人及相手方ヲ呼出スコトヲ要ス但

シ急速ヲ要スル場合ハ此ノ限ニ在ラス

第三百五十條 證據保全ニ關スル記録ハ本訴訟ノ記録ノ存スル裁判所ニ之ヲ送付スルコトヲ要ス

第三百五十一條 證據保全ニ關スル費用ハ訴訟費用ノ一部トス

第二章 區裁判所ノ訴訟手續

第三百五十二條 區裁判所ノ訴訟手續ニハ別段ノ規定アル場合ヲ除クノ外前章ノ規定ヲ準用ス

第三百五十三條 訴ハ口頭ヲ以テ之ヲ提起スルコトヲ得

第三百五十四條 當事者雙方ハ任意ニ裁判所ニ出頭シ訴訟ニ付口頭辯論ヲ爲スコトヲ得此ノ場合ニ於テハ訴ノ提起ハ口頭ノ陳述ニ依リテ之ヲ爲ス

第三百五十五條 被告カ反訴ヲ以テ地方裁判所ノ管轄ニ屬スル請求ヲ爲シタル場合ニ於テ相手方ノ申立アルトキハ區裁判所ハ決定ヲ以テ本訴及反

訴ヲ地方裁判所ニ移送スルコトヲ要ス此ノ場合ニ於テハ第三十二條及第三十四條ノ規定ヲ準用ス

移送ノ決定ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス

第三百五十六條 民事上ノ争ニ付テハ當事者ハ請求ノ趣旨及原因並争ノ實情ヲ表示シテ相手方ノ普通裁判籍所在地ノ區裁判所ニ和解ノ申立ヲ爲スコトヲ得

和解調ヒタルトキハ之ヲ調書ニ記載スルコトヲ要ス

和解調ハサル場合ニ於テ裁判所ハ和解ノ期日ニ出頭シタル當事者雙方ノ申立アルトキハ直ニ訴訟ノ辯論ヲ命ス此ノ場合ニ於テハ和解ノ申立ヲ爲シタル者ハ其ノ申立ヲ爲シタル時ニ於テ訴ヲ提起シタルモノト看做シ和解ノ費用ハ之ヲ訴訟費用ノ一部トス

申立人又ハ相手方カ和解ノ期日ニ出頭セザルトキハ裁判所ハ和解調ハサルモノト看做スコトヲ得

第三百五十七條 口頭辯論ハ書面ヲ以テ之ヲ準備スルコトヲ要セス

相手方カ準備ヲ爲スニ非サレハ陳述ヲ爲スコト能ハスト認ムヘキ事項ハ前項ノ規定ニ拘ラス書面ヲ以テ之ヲ準備スルコトヲ要ス此ノ場合ニ於テハ準備書面ノ提出ニ代ヘ口頭辯論前直接ニ相手方ニ其ノ事項ヲ通知スルコトヲ得

第二百四十七條ノ規定ハ前項ノ通知ヲ爲ササル場合ニ之ヲ準用ス

第三百五十八條 準備手續ニ關スル規定ハ區裁判所ノ訴訟手續ニ之ヲ適用セス

第三百五十九條 判決ニ事實及理由ヲ記載スルニハ請求ノ趣旨及原因ノ要旨、其ノ原因ノ有無並請求ヲ排斥スル理由タル抗辯ノ要旨ヲ表示スルヲ以テ足ル

第三編 上訴

第一章 控訴

第三百六十條 控訴ハ第一審ノ終局判決ニ對シテ之ヲ爲スコトヲ得但シ當事者雙方共ニ控訴ヲ爲ササル旨ノ合意ヲ爲シタルトキハ此ノ限ニ在ラス前項ノ合意ハ上告ヲ爲ス權利ヲ留保シテ之ヲ爲スコトヲ得

第二百五條第二項ノ規定ハ第一項ノ合意ニ之ヲ準用ス

第三百六十一條 財産權上ノ請求ニ關スル判決ニ對シテハ控訴ニ因リテ受クヘキ利益ノ價額カ三百圓ニ滿タサル場合ニ於テハ再審ノ事由アルニ非サレハ控訴ヲ爲スコトヲ得

前項ノ規定ハ訴訟ノ目的ノ價額カ三百圓以上ナル事件ニ付裁判所カ訴訟ノ一部ニ付爲シタル判決ニハ之ヲ適用セス

第一項ノ價額ハ控訴提起ノ時ヲ標準トシテ之ヲ定ム

控訴審ニ於テ擴張シタル請求ノ價額ハ第一項ノ價額ニ之ヲ算入セス

第二十三條ノ規定ハ第一項ノ價額ノ算定ニ之ヲ準用ス

第三百六十二條 訴訟費用ノ裁判ニ對シテハ獨立シテ控訴ヲ爲スコトヲ得

第三百六十三條 終局判決前ノ裁判ハ控訴裁判所ノ判斷ヲ受ク但シ不服ヲ申立ツルコトヲ得サル裁判及抗告ヲ以テ不服ヲ申立ツルコトヲ得ル裁判ハ此ノ限ニ在ラス

第三百六十四條 控訴ハ控訴審ノ終局判決アル迄之ヲ取下クルコトヲ得

第二百三十六條第一項但書第二項第三項、第二百三十七條第一項及第二百三十八條ノ規定ハ控訴ノ取下ニ之ヲ準用ス

第三百六十五條 控訴ヲ爲ス權利ハ之ヲ拋棄スルコトヲ得

第三百六十六條 控訴權ノ拋棄ハ控訴提起前ニ在リテハ第一審裁判所、控

訴提起後ニ在リテハ控訴裁判所ニ對スル申述ニ依リテ之ヲ爲スコトヲ要ス

控訴提起後ノ控訴權ノ拋棄ハ控訴ノ取下ト共ニ之ヲ爲スコトヲ要ス
控訴權拋棄ノ書面ハ之ヲ相手方ニ送達スルコトヲ要ス

第三百六十七條 控訴ハ判決ノ送達アリタル日ヨリ二週間内ニ之ヲ提起スルコトヲ要ス但シ其ノ期間前提起シタル控訴ノ效力ヲ妨ケス

前項ノ期間ハ之ヲ不變期間トス

第三百六十八條 控訴ノ提起ハ控訴狀ヲ第一審裁判所又ハ控訴裁判所ニ提出シテ之ヲ爲スコトヲ要ス

控訴狀ニハ左ノ事項ヲ記載スルコトヲ要ス

一 當事者及法定代理人

二 第一審判決ノ表示及其ノ判決ニ對シ控訴ヲ爲ス旨

第三百六十九條 準備書面ニ關スル規定ハ控訴狀ニ之ヲ準用ス

第三百七十條 第一審裁判所ニ控訴狀ノ提出アリタルトキハ裁判所書記ハ訴訟記録ニ控訴狀ヲ添附シテ遲滯ナク之ヲ控訴裁判所ノ書記ニ送付スルコトヲ要ス

控訴裁判所ニ控訴狀ノ提出アリタルトキハ裁判所書記ハ遲滯ナク第一審裁判所ノ書記ニ訴訟記録ノ送付ヲ求ムルコトヲ要ス

第三百七十一條 第二百二十八條ノ規定ハ控訴狀カ第三百六十八條第二項ノ規定ニ反スル場合、法律ノ規定ニ從ヒ控訴狀ニ印紙ヲ貼用セサル場合及控訴狀ノ送達ヲ爲スコト能ハサル場合ニ之ヲ準用ス

第三百七十二條 控訴狀ハ之ヲ被控訴人ニ送達スルコトヲ要ス

第三百七十三條 被控訴人ハ控訴權消滅ノ後ト雖口頭辯論ノ終結ニ至ル迄附帶控訴ヲ爲スコトヲ得附帶控訴ニ因リテ受クヘキ利益ノ價額カ三百圓ニ滿タサルトキ亦同シ

第三百七十四條 附帶控訴ハ控訴ノ取下アリタルトキ又ハ不適法トシテ控訴ノ棄却アリタルトキハ其ノ效力ヲ失フ但シ控訴ノ要件ヲ具備スルモノハ之ヲ獨立ノ控訴ト看做ス

第三百七十五條 附帶控訴ニ付テハ控訴ニ關スル規定ニ依ル

第三百七十六條 控訴裁判所ハ第一審ノ判決ニ付不服ノ申立ナキ部分ニ限り申立ニ因リ決定ヲ以テ假執行ノ宣言ヲ爲スコトヲ得

第三百七十七條 假執行ニ關スル控訴審ノ裁判ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス

前條ノ申立ヲ却下スル決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得
第三百七十八條 口頭辯論ハ當事者カ第一審ノ判決ノ變更ヲ求ムル限度ニ於テノミ之ヲ爲ス

當事者ハ第一審ニ於ケル口頭辯論ノ結果ヲ陳述スルコトヲ要ス
第三百七十九條 前編第一章ノ規定ハ別段ノ規定アル場合ヲ除クノ外控訴審ノ訴訟手續ニ之ヲ準用ス

第三百八十條 第一審ニ於テ爲シタル訴訟行為ハ控訴審ニ於テモ其ノ效力ヲ有ス

第三百八十一條 第一審ニ於テ爲シタル準備手續ハ控訴審ニ於テモ其ノ效力ヲ有ス

第三百八十二條 控訴審ニ於テハ當事者ハ第一審裁判所カ管轄權ヲ有セサルコトヲ主張スルコトヲ得ス但シ專屬管轄ニ付テハ此ノ限ニ在ラス

第三百八十三條 反訴ハ相手方ノ同意アル場合ニ限り之ヲ提起スルコトヲ得

相手方カ異議ヲ述ヘスシテ反訴ノ本案ニ付辯論ヲ爲シタルトキハ反訴ノ提起ニ同意シタルモノト看做ス

第三百八十四條 不適法ナル控訴ニシテ其ノ欠缺カ補正スルコト能ハサルモノナル場合ニ於テハ口頭辯論ヲ經スシテ判決ヲ以テ之ヲ却下スルコトヲ得

第三百八十五條 控訴裁判所ハ第一審判決ヲ相當トスルトキハ控訴ヲ棄却スルコトヲ要ス

判決カ其ノ理由ニ依レハ不當ナル場合ニ於テモ他ノ理由ニ依リテ正當ナルトキハ控訴ヲ棄却スルコトヲ要ス

第三百八十六條 第一審判決ノ變更ハ不服申立ノ限度ニ於テノミ之ヲ爲スコトヲ得

第三百八十七條 控訴裁判所ハ第一審判決ヲ不當トスルトキハ之ヲ取消スコトヲ要ス

第三百八十八條 第一審ノ判決ノ手續カ法律ニ違背シタルトキハ控訴裁判所ハ判決ヲ取消スコトヲ要ス

第三百八十九條 訴ヲ不適法トシテ却下シタル第一審判決ヲ取消ス場合ニ於テハ控訴裁判所ハ事件ヲ第一審裁判所ニ差戻スコトヲ要ス

第三百九十條 前條ノ場合ノ外控訴裁判所カ第一審判決ヲ取消ス場合ニ於テ事件ニ付尙辯論ヲ爲ス必要アルトキハ之ヲ第一審裁判所ニ差戻スコトヲ得

第一審裁判所ニ於ケル訴訟手續カ法律ニ違背シタルコトヲ理由トシテ事件ヲ差戻ストキハ其ノ訴訟手續ハ之ニ因リテ取消サレタルモノト看做ス
第三百九十一條 事件カ管轄違ナルコトヲ理由トシテ第一審判決ヲ取消ストキハ控訴裁判所ハ判決ヲ以テ事件ヲ管轄裁判所ニ移送スルコトヲ要ス
第三百九十二條 判決ニ事實及理由ヲ記載スルニハ第一審判決ヲ引用スルコトヲ得

第三百九十三條 訴訟完結シタル後上訴ノ提起ナクシテ上訴期間滿了シタルトキハ裁判所書記ハ判決又ハ第三百七十一條ノ規定ニ依ル命令ノ正本ヲ訴訟記録ニ添付シ之ヲ第一審裁判所ノ書記ニ送付スルコトヲ要ス

第二章 上告

第三百九十四條 上告ハ控訴審ノ終局判決ニ對シテ之ヲ爲スコトヲ得

第三百六十條第二項ノ場合ニ於テハ第一審判決ニ對シ直ニ上告ヲ爲スコトヲ得

第三百九十五條 上告ハ判決カ法令ニ違背シタルコトヲ理由トスルトキニ限り之ヲ爲スコトヲ得

第三百九十六條 判決ハ左ノ場合ニ於テハ常ニ法令ニ違背シタルモノトス

一 法律ニ從ヒテ判決裁判所ヲ構成セザリシトキ

二 法律ニ依リ判決ニ關與スルコトヲ得サル判事カ判決ニ關與シタルトキ

三 專屬管轄ニ關スル規定ニ違背シタルトキ

四 法定代理權、訴訟代理權又ハ代理人カ訴訟行爲ヲ爲スニ必要ナル授權ノ欠缺アリタルトキ

五 口頭辯論公開ノ規定ニ違背シタルトキ

六 判決ニ理由ヲ附セス又ハ理由ニ齟齬アルトキ

前項第四號ノ規定ハ第五十四條又ハ第八十七條ノ規定ニ依ル追認アリタル場合ニハ之ヲ適用セス

第三百九十七條 前章ノ規定ハ別段ノ規定アル場合ヲ除クノ外上告及上告審ノ訴訟手續ニ之ヲ準用ス

第三百九十八條 上告狀ニ上告ノ理由ヲ記載セザルトキハ遅クトモ上告期間滿了ノ日ヨリ三十日內ニ上告理由書ヲ提出スルコトヲ要ス

第三百九十九條 上告人カ前條ノ規定ニ違背シ上告理由書ヲ提出セザルトキハ上告裁判所ハ口頭辯論ヲ經スシテ判決ヲ以テ上告ヲ却下スルコトヲ得

第四百條 裁判長ハ相當ノ期間ヲ定メ答辯書ヲ提出スヘキコトヲ被上告人ニ命スルコトヲ得

第四百一條 上告裁判所カ上告狀、上告理由書、答辯書其ノ他ノ書類ニ依リ上告ヲ理由ナシト認ムルトキハ口頭辯論ヲ經スシテ判決ヲ以テ上告ヲ棄却スルコトヲ得

第四百二條 上告裁判所ハ上告理由ニ基キ不服ノ申立アリタル限度ニ於テノミ調査ヲ爲ス

第四百三條 原判決ニ於テ適法ニ確定シタル事實ハ上告裁判所ヲ羈束ス

第四百四條 第三百九十四條第二項ノ規定ニ依ル上告アリタル場合ニ於テハ上告裁判所ハ原判決ニ於ケル事實ノ確定カ法律ニ違背シタルコトヲ理由トシテ其ノ判決ヲ破毀スルコトヲ得ス

第四百五條 第四百二條乃至前條ノ規定ハ裁判所カ職權ヲ以テ調査スヘキ事項ニ之ヲ適用セス

第四百六條 上告裁判所ハ原判決ニ付不服ノ申立ナキ部分ニ限り申立ニ因リ決定ヲ以テ假執行ノ宣言ヲ爲スコトヲ得

第四百七條 上告ヲ理由アリトスルトキハ上告裁判所ハ原判決ヲ破毀シ事件ヲ原裁判所ニ差戻シ又ハ同等ナル他ノ裁判所ニ移送スルコトヲ要ス

差戻又ハ移送ヲ受ケタル裁判所ハ新口頭辯論ニ基キ判決ヲ爲スコトヲ要ス但シ上告裁判所カ破毀ノ理由ト爲シタル事實上及法律上ノ判斷ニ羈束セラル

原判決ニ關與シタル判事ハ前項ノ裁判ニ關與スルコトヲ得ス

第四百八條 左ノ場合ニ於テハ上告裁判所ハ事件ニ付裁判ヲ爲スコトヲ要ス

一 確定シタル事實ニ付法令ノ適用ヲ誤リタルコトヲ理由トシテ判決ヲ

破毀スル場合ニ於テ事件カ其ノ事實ニ基キ裁判ヲ爲スニ熟スルトキ
二 事件カ通常裁判所ノ權限ニ屬セサルコトヲ理由トシテ判決ヲ破毀ス
ルトキ

第四百九條 差戻又ハ移送ノ判決アリタルトキハ裁判所書記ハ其ノ判決ノ
正本ヲ訴訟記録ニ添附シ差戻又ハ移送ヲ受ケタル裁判所ノ書記ニ之ヲ送
付スルコトヲ要ス

第三章 抗告

第四百十條 口頭辯論ヲ經スシテ訴訟手續ニ關スル申立ヲ却下シタル決定
又ハ命令ニ對シテハ抗告ヲ爲スコトヲ得

第四百十一條 決定又ハ命令ヲ以テ裁判ヲ爲スコトヲ得サル事項ニ付決定
又ハ命令ヲ爲シタルトキハ當事者ハ之ニ對シテ抗告ヲ爲スコトヲ得

第四百十二條 受命判事又ハ受託判事ノ裁判ニ對シ不服アル當事者ハ受託
裁判所ニ異議ノ申立ヲ爲スコトヲ得但シ其ノ裁判力受託裁判所ノ裁判ナ
ル場合ニ於テ之ニ對シ抗告ヲ爲シ得ルモノナルトキニ限ル

抗告ハ異議ニ付テノ裁判ニ對シテ之ヲ爲スコトヲ得
第一項ノ規定ハ大審院ニ繫屬スル事件ニ付受命判事又ハ受託判事ノ爲シ
タル裁判ニ之ヲ準用ス

第四百十三條 抗告裁判所ノ決定ニ對シテハ其ノ決定カ法令ニ違背シタル
コトヲ理由トスル場合ニ限り更ニ抗告ヲ爲スコトヲ得

第四百十四條 抗告及抗告裁判所ノ訴訟手續ニハ其ノ性質ニ反セサル限り
第一章ノ規定ヲ準用ス但シ前條ノ抗告及之ニ關スル訴訟手續ニハ前章ノ
規定ヲ準用ス

第四百十五條 即時抗告ハ裁判ノ告知アリタル日ヨリ一週間内ニ之ヲ爲ス
コトヲ要ス

前項ノ期間ハ之ヲ不變期間トス

第四百十六條 抗告ハ原裁判所又ハ抗告裁判所ニ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ
爲スコトヲ要ス

抗告裁判所カ抗告ヲ受ケタル場合ニ於テ適當ト認ムルトキハ事件ヲ原裁
判所ニ送付スルコトヲ得

第四百十七條 原裁判所カ抗告ヲ受ケ又ハ前條第二項ノ規定ニ依リ事件ノ
送付ヲ受ケタル場合ニ於テ抗告ヲ理由アリト認ムルトキハ其ノ裁判ヲ更

正スルコトヲ要ス
抗告ヲ理由ナシト認ムルトキハ意見ヲ附シ事件ヲ抗告裁判所ニ送付スル
コトヲ要ス

第四百十八條 抗告ハ即時抗告ニ限り執行停止ノ效力ヲ有ス
抗告裁判所又ハ原裁判ヲ爲シタル裁判所若ハ判事ハ抗告ニ付決定アル迄
原裁判ノ執行ヲ停止シ其ノ他必要ナル處分ヲ命スルコトヲ得

第四百十九條 抗告裁判所ハ抗告ニ付口頭辯論ヲ命セサル場合ニ於テハ抗
告人其ノ他ノ利害關係人ヲ審訊スルコトヲ得

第四編 再審

第四百二十條 左ノ場合ニ於テハ確定ノ終局判決ニ對シ再審ノ訴ヲ以テ不
服ヲ申立ツルコトヲ得但シ當事者カ上訴ニ依リ其ノ事由ヲ主張シタルト
キ又ハ之ヲ知りテ主張セザリシトキハ此ノ限ニ在ラス

一 法律ニ從ヒテ判決裁判所ヲ構成セザリシトキ

二 法律ニ依リ裁判ニ關與スルコトヲ得サル判事カ裁判ニ關與シタルト
キ

三 法定代理權、訴訟代理權又ハ代理人カ訴訟行為ヲ爲スニ必要ナル授
權ノ欠缺アリタルトキ

四 裁判ニ關與シタル判事カ事件ニ付職務ニ關スル罪ヲ犯シタルトキ

五 刑事上罰スヘキ他人ノ行為ニ因リ自白ヲ爲スニ至リタルトキ又ハ判
決ニ影響ヲ及ホスヘキ攻撃若ハ防禦ノ方法ヲ提出スルコトヲ妨ケラレ
タルトキ

六 判決ノ證據ト爲リタル文書其ノ他ノ物件カ偽造又ハ變造セラレタル
モノナリシトキ

七 證人、鑑定人、通事又ハ宣誓シタル當事者若ハ法定代理人ノ虛偽ノ
陳述カ判決ノ證據ト爲リタルトキ

八 判決ノ基礎ト爲リタル民事若ハ刑事ノ判決其ノ他ノ裁判又ハ行政處
分カ後ノ裁判又ハ行政處分ニ依リテ變更セラレタルトキ

九 判決ニ影響ヲ及ホスヘキ重要ナル事項ニ付判斷ヲ遺脱シタルトキ

十 不服ノ申立アル判決カ前ニ言渡サレタル確定判決ト抵觸スルトキ
前項第四號乃至第七號ノ場合ニ於テハ罰スヘキ行為ニ付有罪ノ判決若ハ
過料ノ裁判確定シタルトキ又ハ證據欠缺外ノ理由ニ因リ有罪ノ確定判決

若ハ過料ノ確定裁判ヲ得ルコト能ハサルトキハ限り再審ノ訴ヲ提起スルコトヲ得

控訴審ニ於テ事件ニ付本案判決ヲ爲シタルトキハ第一審ノ判決ニ對シ再審ノ訴ヲ提起スルコトヲ得ス

第四百二十一條 判決ノ基本タル裁判ニ付前條ニ定メタル事由アルトキハ其ノ裁判ニ對シ獨立ノ不服ノ方法ヲ定メタル場合ニ於テモ其ノ事由ヲ以テ判決ニ對スル再審ノ理由ト爲スコトヲ得

第四百二十二條 再審ハ不服ノ申立アル判決ヲ爲シタル裁判所ノ專屬管轄トス

審級ヲ異ニスル裁判所カ同一事件ニ付爲シタル判決ニ對スル再審ノ訴ハ上級裁判所併セテ之ヲ管轄ス

第四百二十三條 再審ノ訴訟手續ニハ其ノ性質ニ反セサル限り各審級ニ於ケル訴訟手續ニ關スル規定ヲ準用ス

第四百二十四條 再審ノ訴ハ當事者カ判決確定後再審ノ事由ヲ知リタル日ヨリ二週間内ニ之ヲ提起スルコトヲ要ス

前項ノ期間ハ之ヲ不變期間トス
判決確定後五年ヲ經過シタルトキハ再審ノ訴ハ之ヲ提起スルコトヲ得ス

再審ノ事由カ判決確定後ニ生シタルトキハ前項ノ期間ハ其ノ事由發生ノ日ヨリ之ヲ起算ス

第四百二十五條 前條ノ規定ハ代理權ノ欠缺及第四百二十條第一項第十號ニ掲クル事項ヲ理由トスル再審ノ訴ニハ之ヲ適用セス

第四百二十六條 訴狀ニハ左ノ事項ヲ記載スルコトヲ要ス
一 當事者及法定代理人

二 不服ノ申立アル判決ノ表示及其ノ判決ニ對シ再審ヲ求ムル旨

三 不服ノ理由
第四百二十七條 本案ノ辯論及裁判ハ不服ノ範圍内ニ於テノミ之ヲ爲スコトヲ得

第四百二十八條 再審ノ事由アル場合ニ於テモ判決ヲ正當トスルトキハ裁判所ハ再審ノ訴ヲ却下スルコトヲ要ス

第四百二十九條 即時抗告ヲ以テ不服ヲ申立ツルコトヲ得ル決定又ハ命令カ確定シタル場合ニ於テ第四百二十條第一項ニ掲クル事由アルトキハ確定判決ニ對スル第四百二十條乃至前條ノ規定ニ準シ再審ノ申立ヲ爲スコトヲ得

第五編 督促手續

第四百三十條 金錢其ノ他ノ代替物又ハ有價證券ノ一定ノ數量ノ給付ヲ目的トスル請求ニ付テハ裁判ハ債權者ノ申立ニ因リ支拂命令ヲ發スルコトヲ得但シ日本ニ於テ公示送達ニ依ラスシテ其ノ命令ノ送達ヲ爲スコトヲ得ヘキ場合ニ限ル

第四百三十一條 督促手續ハ債務者ノ普通裁判籍所在地ノ區裁判所又ハ第九條ノ規定ニ依ル管轄區裁判所ノ專屬管轄トス

第四百三十二條 支拂命令ノ申立ニハ其ノ性質ニ反セサル限り訴ニ關スル規定ヲ準用ス

第四百三十三條 支拂命令ノ申立カ第四百三十條若ハ管轄ニ關スル規定ニ違背スルトキ又ハ申立ノ趣旨ニ依リ請求ノ理由ナキコト明ナルトキハ其ノ申立ハ之ヲ却下スルコトヲ要ス請求ノ一部ニ付支拂命令ヲ發スルコトヲ得サルトキ其ノ一部ニ付亦同シ

申立却下ノ決定ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス

第四百三十四條 支拂命令ハ債務者ヲ審訊セスシテ之ヲ發ス

債務者ハ支拂命令ニ對シ異議ノ申立ヲ爲スコトヲ得

第四百三十五條 支拂命令ニハ當事者、法定代理人並請求ノ趣旨及原因ヲ記載シ且債務者カ支拂命令送達ノ日ヨリ二週間内ニ異議ヲ申立テサルトキハ債權者ノ申立ニ因リ假執行ノ宣言ヲ爲スヘキ旨ヲ附記スルコトヲ要ス

第四百三十六條 支拂命令ハ之ヲ當事者ニ送達スルコトヲ要ス

第四百三十七條 債務者カ假執行ノ宣言前異議ヲ申立テタルトキハ支拂命令ハ其ノ異議ノ範圍ニ於テ效力ヲ失フ

第四百三十八條 債務者カ支拂命令送達ノ日ヨリ二週間内ニ異議ヲ申立テサルトキハ裁判所ハ債權者ノ申立ニ因リ支拂命令ニ手續ノ費用額ヲ附記シ假執行ノ宣言ヲ爲スコトヲ要ス但シ其ノ宣言前異議ノ申立アリタルトキハ此ノ限りニ在ラス

假執行ノ宣言ハ支拂命令ノ原本及正本ニ之ヲ記載シ其ノ正本ヲ當事者ニ送達スルコトヲ要ス

假執行ノ申立却下ノ決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第四百三十九條 債權者カ假執行ノ申立ヲ爲スコトヲ得ル時ヨリ三十日內ニ其ノ申立ヲ爲ササルトキハ支拂命令ハ其ノ效力ヲ失フ

第四百四十條 假執行ノ宣言ヲ附シタル支拂命令送達ノ日ヨリ二週間ヲ經過シタルトキハ債務者ハ其ノ支拂命令ニ對シ異議ヲ申立ツルコトヲ得

前項ノ期間ハ之ヲ不變期間トス

第四百四十一條 區裁判所カ異議ヲ不適法ト認ムルトキハ請求カ地方裁判所ノ管轄ニ屬スル場合ニ於テモ決定ヲ以テ其ノ異議ヲ却下スルコトヲ要ス此ノ決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第四百四十二條 支拂命令ニ對シ適法ナル異議ノ申立アリタルトキハ異議アル請求ニ付テハ其ノ目的ノ價額ニ從ヒ支拂命令ノ申立ノ時ニ於テ其ノ命令ヲ發シタル區裁判所又ハ其ノ區裁判所ノ所在地ヲ管轄スル地方裁判所ニ訴ノ提起アリタルモノト看做ス此ノ場合ニ於テハ督促手續ノ費用ハ之ヲ訴訟費用ノ一部トス

前項ノ規定ニ依リテ地方裁判所ニ訴ノ提起アリタルモノト看做サレタル場合ニ於テハ裁判所書記ハ遲滯ナク訴訟記録ヲ地方裁判所ノ書記ニ送付スルコトヲ要ス

第四百四十三條 假執行ノ宣言ヲ附シタル支拂命令ニ對シ異議ノ申立ナキトキ又ハ異議却下ノ決定確定シタルトキハ支拂命令ハ確定判決ト同一ノ效力ヲ有ス

第四百四十四條乃至第四百九十六條 削除

第四百九十七條ノ二 判決カ其判決ニ表示シタル當事者以外ノ者ニ對シ效力ヲ有ス可キトキハ其者ニ對シ又ハ其者ノ爲メニモ之ヲ執行スルコトヲ得但第六十四條ノ規定ニ依ル參加人ニ付テハ此限ニ在ラス

前項ノ場合ニ於テ執行力アル正本ノ付與ニ付テハ第五百十九條乃至第五百二十一條ノ規定ヲ準用ス

第五百條中「原狀回復又ハ」ヲ削ル

第五百一條乃至第五百十一條 削除

第五百十二條中「故障ヲ申立又ハ上訴ヲ起シタルトキ」ヲ「上訴ヲ提起シタルトキ又ハ假執行ノ宣言ヲ付シタル支拂命令ニ對シ異議ヲ申立テタルトキ」ニ改ム

第五百十三條ニ左ノ一項ヲ加フ

第一百二十二條、第一百十三條、第一百十五條及ヒ第一百十六條ノ規定ハ第一項ノ規定ニ依ル保證ニ付キ之ヲ準用ス

第五百十四條中「第十七條」ヲ「第八條」ニ改ム

第五百十五條第二項中第二號ヲ左ノ如ク改メ第三號乃至第五號ヲ削ル

第二 外國判決カ第二百條ノ條件ヲ具備セサルトキ

第五百四十一條中「第三百二十九條、第四百十條及ヒ第四百十五條乃至第四百十九條」ヲ「第六十七條、第六十八條、第七十一條及ヒ第七十二條」ニ改ム

第五百四十五條第二項中「其原因ヲ生シ且故障ヲ以テ之ヲ主張スルコトヲ得サルトキ」ヲ「其原因ヲ生シタルトキ」ニ改ム

第五百四十八條第三項ヲ左ノ如ク改ム

右裁判ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス

第五百五十條第三號ヲ左ノ如ク改ム

第三 執行ヲ免カルル爲メ擔保ヲ供シタルコトヲ證スル書面

第五百五十九條中第三號及第四號ヲ削リ第五號ヲ第三號トシ第二號ヲ左ノ如ク改ム

第二 假執行ノ宣言ヲ付シタル支拂命令

第五百六十條中「債務名義」ヲ「債務名義及ヒ訴訟上ノ和解並ニ請求ノ拋棄又ハ認諾」ニ改ム

第五百六十一條中「執行命令」ヲ「假執行ノ宣言ヲ付シタル支拂命令」ニ改ム

第五百六十二條中「第十七條」ヲ「第八條」ニ改ム

第五百九十五條 執行裁判所トシテハ債務者ノ普通裁判籍ヲ有スル地ノ區裁判所、此區裁判所ナキトキハ差押フヘキ債權ノ所在地ヲ管轄スル區裁判所管轄權ヲ有ス

差押フヘキ債權ハ第三債務者ノ普通裁判籍ノ所在地ニ在ルモノトス但物

ノ引渡ヲ目的トスル債權及ヒ物上ノ擔保權ヲ有スル債權ハ其物ノ所在地ニ在ルモノトス

第六百七十七條中「第五百五條第二項ニ從ヒテ債務者ニ保證ヲ立テシメ又ハ供託ヲ爲サシメテ」ヲ「第九十六條第二項ニ從ヒテ債務者ニ擔保ヲ供セシメテ」ニ改ム

第六百三十七條中「看做ス旨ノ闕席判決ヲ爲スコシ」ヲ「看做ス」ニ改ム

第六百三十八條 第六百三十六條ノ判決ノ確定シタルコト又ハ前條ノ規定ニ從ヒ異議ヲ取下ケタルモノト看做サレタルコトノ證明アルトキハ配當

裁判所ハ之ニ基キ支拂又ハ他ノ配當手續ヲ命ス

第六百四十一條中「第二十六條ノ規定ヲ適用ス」ヲ「各區裁判所管轄權ヲ有ス此場合ニ於テ裁判所必要アリト認ムルトキハ事件ヲ他ノ管轄區裁判所ニ移送スルコトヲ得」ニ改ム

第六百六十九條中「第四百三十三條第三項」ヲ「第七十條第二項及ヒ第七十三條」ニ改ム

第六百七十七條中「第二百二十九條乃至第三百二十二條及ヒ第三百三十四條」ヲ「第四百二十二條乃至第四百十七條」ニ改ム

第六百八十一條中「取消ノ訴若クハ原狀回復ノ訴」ヲ「再審ノ訴」ニ改ム

第七百五十六條ノ二 假處分ヲ取消ス判決ハ財産權上ノ請求ニ關セサルモノニ付テモ假執行ノ宣言ヲ爲スコトヲ得

第七百六十六條中「之ヲ爲シ其他法律ニ別段ノ規定ヲ設ケサルトキハ第五十七條第三項ノ規定ニ從ヒテ」ヲ削リ同條ニ左ノ一項ヲ加フ

裁判所相當ト認ムルトキハ新聞紙ニ公告ス可キコトヲ命スルコトヲ得

第七百七十四條第二項第六號ヲ左ノ如ク改ム

第六 第四百二十條第四號乃至第八號ノ場合ニ於テ再審ノ訴ヲ許ス條

件ノ存スルトキ

第七百七十六條中「第二百二十條ノ條件ノ存セサルトキト雖モ」ヲ削ル

第八百一十一條第六號ヲ左ノ如ク改ム

第六 第四百二十條第四號乃至第八號ノ場合ニ於テ再審ノ訴ヲ許ス條

民事訴訟法中改正法律施行法案
勅旨ヲ奉シ帝國議會ニ提出ス
大正十五年二月十二日
右
民事訴訟法中改正法律施行法
第一條 本法ニ於テ新法ト稱スルハ大正十五年民事訴訟法中改正法律ニ依ル改正規定ヲ謂ヒ舊法ト稱スルハ從前ノ規定ヲ謂フ
第二條 新法ハ新法施行前ニ生シタル事項ニ亦之ヲ適用ス但シ舊法ニ依リテ生シタル效力ヲ妨ケス
第三條 新法施行前ヨリ繫屬スル事件ニ付新法ニ依リ管轄權アル裁判所ハ舊法ニ依レハ管轄權ナキ場合ニ於テモ管轄權ヲ有ス
前項ノ事件ニ付舊法ニ依リ管轄權アル裁判所ハ新法ニ依レハ管轄權ナキ場合ニ於テモ管轄權ヲ有ス
第四條 新法ニ依リ新ニ期間ヲ定メタル訴訟行爲ニシテ新法施行ノ際爲スヘキモノニ付テハ其ノ期間ハ新法施行ノ日ヨリ之ヲ起算ス
第五條 新法第八十五條ノ規定ハ新法施行前同條ニ掲クル事由ヲ生シタル訴訟代理ニシテ新法施行前委任消滅ノ通知ヲ爲ササリシモノニモ之ヲ適用ス
第六條 新法施行前ヨリ繫屬スル訴訟ニ付テハ舊法ニ依リ訴訟費用ノ保證ヲ立ツル義務ナキ者ハ新法ニ依リ擔保ヲ供スルコトヲ要セス
第七條 新法施行前ヨリ進行ヲ始メタル法定期間及其ノ計算ハ舊法ニ依ル
新法施行前言渡シタル判決ニ對スル上訴ノ期間カ新法施行後進行ヲ始メタル場合亦前項ニ同シ
第八條 新法施行前裁判所書記カ判決原本ノ交付ヲ受ケタルトキハ其ノ判決ノ送達ハ申立アルニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ要セス
第九條 新法施行前ヨリ繫屬スル訴訟ニ付テハ特ニ裁判所ノ命シタル場合

附 則
本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

ニ限り新法ニ依リ準備手續ヲ爲ス

第十條 新法施行前舊法ニ依リテ罰金又ハ過料ニ處スヘキ行爲ヲ爲シタル者ニシテ新法施行ノ際未タ其ノ裁判ヲ受ケサルモノハ新法ニ於テ過料ニ處スヘキ場合ニ限り新法ニ依リ處罰ス但シ過料ノ額ハ舊法ノ罰金又ハ過料ノ額ヲ超ユルコトヲ得ス

第十一條 新法施行前ヨリ繫屬スル訴訟ニ付言渡シタル判決ニ對シテハ上訴ニ因リテ受クヘキ利益ノ價額三百圓ニ滿タサル場合ニ於テモ上訴ヲ爲スコトヲ得

第十二條 新法施行前第一審裁判所又ハ控訴裁判所カ管轄違トシテ訴ヲ却下シタル場合ニ於テ上訴裁判所カ第一審裁判所ニ其ノ管轄權ナシトスルトキハ判決ヲ以テ事件ヲ第一審ノ管轄裁判所ニ移送スルコトヲ要ス
前項ノ場合ニ於テ上訴裁判所カ第一審裁判所ニ管轄權アリトスルトキハ事件ヲ其ノ裁判所ニ差戻スコトヲ要ス但シ第一審裁判所カ管轄權アリト爲シタル事件ニ付控訴裁判所カ管轄違トシテ訴ヲ却下シタル場合ニ於テハ上告裁判所ハ事件ヲ控訴裁判所ニ差戻スコトヲ得

第十三條 新法施行前抗告裁判所ノ爲シタル決定ニ對シテハ仍舊法ニ依リ更ニ抗告ヲ爲スコトヲ得

第十四條 闕席判決ニ對シテハ仍舊法ニ依リ故障ヲ申立ツルコトヲ得
執行命令ニ對シテハ舊法ニ依ル故障期間内ニ異議ヲ申立ツルコトヲ得

第十五條 新法施行前妨訴抗辯ヲ棄却シ又ハ請求ノ原因ヲ正當ナリトシタル中間判決ニ對シテハ仍舊法ニ依リ上訴ヲ爲スコトヲ得

第十六條 新法施行前ヨリ繫屬スル證書訴訟及爲替訴訟ハ仍舊法ニ依リ之ヲ完結ス但シ訴訟カ新法施行ノ際第一審ニ繫屬スルトキハ新法施行ノ日ヨリ通常ノ手續ニ於テ繫屬スルモノト看做ス

第十七條 故障ヲ許ササル闕席判決ニ對シテハ仍舊法ニ依リ上訴ヲ爲スコトヲ得

第十八條 新法施行前請求ノ拋棄又ハ認諾ニ基キ判決ヲ求ムル申立アリタルトキハ仍舊法ニ依リ裁判ス新法施行前闕席判決ノ申立アリタルトキ亦同シ

第十九條 新法施行前言渡シタル判決ニシテ舊法第四百二十二條ニ掲クルモノニ對シ控訴ノ提起アリタル場合ニ於テハ仍舊法ノ規定ニ依ル

附 則

本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

〔國務大臣江木翼君演壇ニ登ル〕

○國務大臣(江木翼君) 唯今、議題トナリマシタル民事訴訟法中改正法律案外一件ニ關シマシテ御説明ヲ申上ゲマス、現行民事訴訟法ハ明治二十三年ノ制定ニ係リマシテ、其翌二十四年ニ實施イタサレタモノデゴザリマス、爾來三十有餘年ヲ經過イタシマシテ、其間一、二、改正セラレタ所ガ無イデハアリマセケレドモ、殆ド大體ニ於キマシテ當初制定ノ儘デゴザイマシテ、不備ノ點モ甚ダ少ナクナイノデゴザリマス、本法ノ改正ニ付キマシテハ、既ニ明治二十八年ニ其必要ヲ認メラレ、司法省内ニ委員會ヲ設ケ、之ガ調査ニ著手イタシタノデゴザリマス、明治三十二年ニ其事業ハ法典調査會ニ引繼ガレマシテ、法典調査會ハ明治三十六年ニ民事訴訟法ノ改正法律草案ヲ脱稿イタシマシテ、之ヲ世間ニ公ケニ致シタノデゴザリマス、其後、明治四十四年ニ至リマシテ、法律取調委員會ニ於キマシテ、本法ノ改正ニ更ニ著手イタシマシテ、前ニ公表イタサレマシタル所ノ法典調査會ノ成案ヲ基礎ト致シマシテ、其上ニ裁判所、辯護士會、商業會議所等ノ意見ヲ徵シマシテ、審議ヲ進メタノデゴザリマス、其中途ニ致シマシテ、大正八年ニ法律取調委員會ハ廢止イタサレ、是ト同時ニ司法省ニ民事訴訟法改正調査委員會ナルモノヲ設ケマシテ、其委員ハ大體、前法典調査會及法律取調委員會ノ委員タリシ人、ニ委嘱イタシマシテ此事業ヲ繼續イタシ、斯様ニ致シマシテ、漸ク稿ヲ脱シマシテ、茲ニ提案ヲ致ス順序トナッタノデゴザリマス、即チ本案ハ學者、老練ナル裁判官、辯護士等、特別ノ學識經驗アル委員ヲ以テ組織イタサレタル所ノ委員會ニ於テ、多年ノ間、各方面ノ意見ヲ徵シ、參酌シ、慎重審議ヲ重ネテ、起草立案ヲ致シタモノデゴザリマス、而シテ本案ハ現行法ノ第一編乃至第五編ノ改正ヲ目的ト致スモノデゴザリマシテ、第六編以下ノ規定ニ付キマシテハ、其改正ヲ他日ニ讓ルコトト致シマシテ、唯、五編マデノ改正ヲ致シマシタル結果、當然改ムルノ必要アル部分ダケニ付キマシテ、整理の意味ニ於テ若干ノ改正ヲ加ヘルニ止メタノデゴザリマス、本案ノ内容ハ、現行法ノ第一編乃至第五編ニ互ル殆ド全部ノ改正ヲ企テタモノデゴザリマシテ、要スルニ改正案ノ目的ト致シマスル所ハ、多年ノ經驗ニ鑑ミマシテ、現行法ノ弊ト致ス所ヲ改メ、畢竟訴訟ノ延滞ヲ防ギ、其圓滑ナル進捗ヲ圖リ、且ツ訴訟ノ準備ヲ周到ニ

シテ、以テ審理ノ適正ヲ期セムトスルモノデゴザリマス、將又、民事訴訟法中改正法律施行法案ハ、民事訴訟法改正ノ結果、改正法施行ノ際ニ於ケル新舊二法ノ經過ヲ圓滑ナラシメル爲ニ、相當ノ規定ヲ設ケタモノデゴザリマス、諸君ハ慎重審議以テ御協賛ヲ與ヘラレムコトヲ切望イタス次第デゴザリマス

○議長(公府徳川家達君) 通告ニ依リマシテ富谷君ニ質疑ノ發言ヲ許シマス

〔富谷銚太郎君演壇ニ登ル〕

○富谷銚太郎君 本員ハ唯今司法大臣ノ御説明ニナリマシタル法律案ニ付テ、主務大臣カラ伺ヒタイコトガ二三點ゴザリマス、極メテ簡單デゴザリマスルガ、暫時ノ間ドウゾ御清聴ヲ煩ハシタイノデアリマス、其第一點ハ、本改正案ノ施行ノ時ハ、イツニナルノデアリカト云フコト、案其モノハマダ閱覽ヲ致ス時モ無イノデゴザリマスルガ、確カ勅令ヲ以テ施行ノ時ヲ御定メニナルト云フコトニ書イテアルト心得マシテゴザリマス、多分サウデゴザリマセウ、デ其施行ノ時期ガイツ頃ニナル御見込デアアルカト云フコトヲ、若シ御定メニナツテ居リマスルナラバ、伺ヒタイノデゴザリマス、デ此事ヲ伺ヒマスル理由ハ、深ク私ガ此處デ述ベル迄モゴザリマセヌガ、御承知ノ如ク、民事訴訟法ノ如キ最モ社會ノ實生活ニ深イ關係ヲ有ツテ居リマスル法律デゴザリマスルノデ、其法律ノ實行ガドウアルカ、即チ法律ガ能ク圓滑ニ、立法者ノ希望シタ如キ趣意ニ於テ行ハルルヤ否ヤト云フコトハ、最モ大切ノコトデゴザリマスルカラ、此法律ノ施行ニ直接ニ關係ノアル人達ノ研究時期モ……研究ノ時モ必要デゴザリマセウシ、又其用意ヲシナケリヤナラヌト云フコトモアルノデアリマス、勿論、現在ノ法律ニ於テ、實務ニ從事シテ居ル人ノ知識經驗、其常識ニ依リマシテ此法律ヲ實行スルコトハ、ソレ程ノ困難ナコトデハナイト思ヒマスルケレドモ、此法律ハ……即チ此法律ト申シマスルノハ、私ハ新シイ法律ヲ申シマスノデ、此法律ハ、舊……ト云フノハ現在ノデス、現行民事訴訟法トハ、大分相違ノ點ガアルヤウニ思フノデゴザリマス、從來ノ訴訟法ニ於テハ缺陷ガアル、不足ナル……足ラナイ所ガアル、或ハ不十分ナル點ガアルト云フヤウナ所カラシテ、改正セラレタ御趣意ハ誠ニ結構デアリマシテ、我々モ其事ハ豫テ心得テ居ッタノデアリマス、其點ガ今回提出セラレタ法案ノ中ニハ、極メテ明瞭ニ分ルヤウニ、又行ヒ易イヤウニ出來テ居ルモノトハ存ジテ居リマスガ、マダ之ヲ見ル暇モナイノデゴザリマスルガ、要スルニ此法律ハ舊法ニ比スレバ、極メテ良イ法律ニナルノデアラウト思ヒマ

スル、併シ皆御承知ノ如ク、此法律取調會ノ仕事ハ、經過ト致シマシテハ隨分長イコトデアリマスルケレドモ、其間ニ於テ取調ノ結果ハドンナデアラウカト云フコトヲ、世ノ中ノ人ガ知ルコトハ出來ナカッタノデアアル、即チ法典調査會ニ於テ成案トナリマシタ民事訴訟法案ノ世ニ公布セラレタ以外ノコトハ、能ク分ラナイノデアリマスルカラ、或ハ此法律ニ付テハ多少ノ意見ヲ有ッテ居ル者モアルノデアリマセウガ、併シソレハ別ト致シマシテ、何レト致シマシテモ、此法律ノ施行ニハ多少ノ時間ヲ要スルコトト思フノデアリマス、即チ其時期ハイツノ時デアアルカト云フコトハ、實際ニ於テハ少カラザル、利害ノ關係ト申シマセウカ、種々ノ點ニ於テ影響ノアルモノト思ヒマスルノデ、此法律施行ノ時間ガイツ頃ニナルコトデアアルカト云フノヲ伺フ譯デアリマス、ソレカラ第二ニハ、是モ極メテ簡單デゴザリマスルガ、民事訴訟法ノ施行以來、數年間研究ヲセラレタ實際ノ方面カラ見マシテ、此法律ニ缺陷ノアルコトハ殆ド疑ノ無イコトデアリマス、併ナガラ舊民事訴訟モ、マダ十分ニ施行セラレテ居ラナカッタト云フコトハ、我々モ如何ニモ遺憾ニ思フ、隨分裁判官ナリ或ハ此訴訟ニ關與スル人ガ取扱方……事件ノ取扱方、訴訟法ノ解釋ノ仕方ニ依ツテハ、改正セヌデモ宜カッタラウト思ハレル點モ無イデハナイデアリマセウ、サウ云フコトモ亦實際家カラモ承ツテ居リマスガ、何レニ致シマシテモ、此法律ガ社會ノ實情ニ適ツテ、能ク唯今司法大臣ガ御述ベニナリマシタ如キ結果ヲ得ルニ至ルヤ否ヤト云フコトハ、之ヲ取扱フ人ニ存スルノデアアル、法ハ死物デアツテ、如何ナル良法ト雖モ、之ヲ取扱フ人ノ如何ニ依ツテハ、其法ノ精神ハ勿論、法ノ期待シタ所ノ目的ヲ達スルコトガ出來ナイノデアリマス、此法律ヲ取扱フ人、其人ノ知識經驗、殊ニ其人ノ人格ノ優良ナルヤ否ヤト云フ點ニ於テモ、非常ナル影響ノアルモノト考ヘルノデアリマス、我が司法部ノ事務ニ從事シテ居ラレル、一般ニ申シマスルト司法官、又之ニ重要ナル補助ヲシテ居リマスル屬官、庶務ニ從事シテ居ル書記ト云フヤウナ人ノ取扱……之ニ對スル待遇ト云ヒマスカ、取扱ハドウモ一般ノ行政官ト少シ違ツテ居ル、言葉ヲ一言ニ申シマスルト、一般行政官ノ待遇ヨリモ幾ラカ下サレテ居ル、惡クハ申シマセヌ、優遇ドコロヂヤナイ、劣遇サレテ居ルト云フコトハ、是迄アッタノデアリマスガ、當局者ノ段々ノ御骨折デ、近年ハ……近頃ニ至リマシテ殊ニ此點ニハ改良セラレタヤウデアリマスルカラ、追々良クナルノデゴザイマセウガ、併シ唯今ニ於テモ未ダ、司法官ノ待遇ハ他ノ一

般行政官ニ比シテ、頗ルトハ申シマセヌ、餘程多ク劣ッテ居ルヤウニ考ヘラレ
ルノデアリマス、同ジク公務ニ從事スル役人デアッテ、サウシテ其人ノ取扱ガ
異ナルト云フコトハ、種々ノ方面カラ來ッテ、沿革的ノコトモゴザイマセウ
ガ、主トシテハ財政ノ御都合デアラウト思フノデアリマス、併シ此人ノ待遇、
即チ物質的待遇ト申シマスルカ、其方面ニ於テハ、司法省……司法部ニ人ヲ得
ルコトノ出來ル……相當人ト云ヒマセウカ、人ヲ得ルコトハ何時デモ出來
ル……先程申シマシタ如ク、學識經驗ヲ有シ、又人モ確カデアルト云フヤウ
ナ人ヲ澤山入レルト云フコトハ、多少ノ妨ゲニナルノデハナカラウカト思フ
ノデアリマス、司法官ノ其人ヲ多ク得ル方法……其人ト申シマスルノハ、適
當ナル人ヲ十分ニ入レルト云フコトニ付テハ、矢張り此物質的優遇ノ方法ヲ
モ御計リニナラナケレバナラヌノデアリマス、ト思フノデゴザリマス、ナゼ
私ガ此コトヲ申スカト申シマスルト、先ニ述ベマシタル如ク、法律ハ如何ニ
改正ヲシテモ、如何ニ改正サレテモ、之ヲ扱フ人ガ十分ノ技術ガ無イ以上ハ、
詰リ、其死物ハ死ンダ儘デ居ルト云フヤウナ形ニナルノデアリマス、此人ヲ
シテ十分法律ノ希望目的ヲ達スルヤウニシヤウト云フノニハ、其人ヲ得ナケ
レバナラヌ、其人ヲ得ルノニハ、所謂此物質的ノ取扱モ、其方面ノ待遇方モ
良クシナケレバナラヌト云フコトハ、確カナル一點デアラウト思フノデアリ
マス、又他ノ一方カラ見マシテ、此司法官ノ取扱ニ付テハ、物質的ノ待遇ヲ
一般行政官ト同等ニスルト云フコトノ外ニ、其任務ヲ扱ハシムル上ニ於テ、
多少名譽ノ地位ヲ與ヘルト云フコトモ、是モ必要ナル點デハナカラウカト思
フノデアリマス、御承知ノ如ク、官制上ニ於テハ、或ル一定ノ地位ニハ、ソ
レダケニ限ラレタル待遇シカシテナイ、是ハ已ムヲ得ヌノデアリマスガ、併
シ重要ナル地位ニ居ッテ、サウシテ重要ナル地位ト云フノハ、地位ノ高イ低イ
ヲ云フノデアリマセヌ、仕事ノ方面カラ見テ極メテ大切ナルコト、最モ人
民ニ接近、所謂民衆ニ接近イタス地位ニ居ル、區裁判所ノ判事ノ取扱ノ如キ
ハ、唯今ノ所デハ先ヅ重要視セラレテ居ルヤ否ヤト云フコトニ付テ、私ハ疑
ヲ懷カナケレバナラヌ點ガアルノデゴザリマス、東京地方裁判所ノ管内デ申
シマスルト、其區裁判所ノ監督判事、上席判事ノ如キハ、極メテ忙シイ、大
切ナ仕事ヲシテ居ルノデアリマスルケレドモ、其取扱、待遇ノ方面カラ見マス
ルト、決シテ私ハ其地位ニ在ル人ヲ満足セシムルコトノ出來ルモノデナイト
思フノデアリマス、言葉ヲ換ヘテ申シマスルト、區裁判所ノ監督判事ノ如キ、

繁劇ナル地位ニ居ル人ヲ扱フ、待遇スル上ニ於テ、頗ル遺憾ニ感ズル點ガア
ルノデアリマス、是ハ代々ノ司法大臣ガ、此點ニ付テハ定メテ御留意ニナッテ
居リ、且其事ハ出來得ルダケ十分ナル扱ヒヲシヤウト云フ御考ハアルモノト
ハ存ジマスルガ、併シ實現サレタコトハ無イノデアリマス、他ノ國ノ例ナド
ニ於キマシテハ、此區裁判所ノ長ト云フヤウナ者ハ、他ノ地方裁判所ノ所長
トモ同ジヤウナ待遇ヲシテ居ル、サウシテ其地位ニ安ンゼシメテ、其名譽心
ヲモ十分ニ満足セシムルト云フヤウナル取扱方ニナッテ居ルヤウニ承知イタ
シテ居リマス、唯今デモ其通りデアリマセウ、私ガ昔、留學イタシタ時分ニ
モ、ソシナ考ヲ持ッタコトガアッタノデアリマス、此點ハ實際ノ事ニ御關係ニ
御ナリニナリマシタ方ハ、定メテ御承知デゴザイマセウガ、區裁判所ノ監督
判事トカ云フヤウナ人ノ地位ハ、此階級ノ上カラ申シマスルト、ズット下ノ方
ニ居ル、地方裁判所ノ所長ヨリモ、或ハ控訴院ノ部長ナドヨリモ、又大審院
ノ陪席判事ノ地位ヨリモ、ズット下ニ置イテアルノデアリマスケレドモ、仕事
ノ上カラ見ルト、是等ノ人ヨリモ忙シイ、ムツカシイ、サウシテ十分ノ知識
經驗ガナケレバナラナイ仕事ヲシテ居ルノデゴザイマス、是等ノ人ニ對シテ
特別ノ、満足ナルト申シマスカ、満足ナラシムルニ足ルヤウナル御扱ヒガ出
來ルヤウニ思フノデアリマスガ、サウ云フ御考ハ有ルノデアリマセウカ、無
イカト云フコトヲ伺ヒタイ、又モウ一ツニハ、殊ニ此際ニハ、御盡力下サレ
タト云フコトガ新聞ニハ書イテアリマスガ、司法官ニ一般文官ト同様ナル俸
給ヲ御與ヘニナルト云フコトヲ、御實行ニナル御考ヲ遂行セラレルノデア
ルカ、ト云フコトヲ伺ヒタイノデゴザイマス、是ガ第二、第三ハ第一ト關聯シ
テ居ルモノデゴザイマス、即チ施行ニ關シテ伺ヒタイノデゴザイマス、民事
訴訟法ノ改正案トシテ、御提出ニナリマシタモノハ、民事訴訟法ノ一部デア
リマス、大部分デハゴザイマスルガ、一部デアリマス、殘ッテ居ルモノガ大分
アルヤウニ思ヒマス、其中ニ最モ重要ナル關係ノアルモノハ、強制執行デゴ
ザイマス、此強制執行ト云フモノハ、申ス迄モナク裁判所デ取扱ッタ事件ノ結
末ヲ付ケル、其判決通りニ思フヤウニイカスト云フ時ニ、強制的ニ此判決ニ
依ッテ利害ノ關係アル者ガ満足ヲ得ルモノハ、即チ此規定デアリマス、即チ此
強制執行ノ規定ハ、今度ハ引離サレテ別ノ法律トナッテ出ルヤウデゴザイマ
スト思ヒマスガ、此法律ハ單獨ノ法律トナッテ出ルノデアルカ、或ハドウ云フ
モノニナルノデアアルカト云フコトモ、一應伺ヒタウゴザイマスルシ、又更ニ

我が民事訴訟法ノ中ニ、人事訴訟法ト云フ法律ガ一ツゴザイマスルガ、此人
 事訴訟法ト云フノハ、唯今法律審議會ニ繫屬シテ居ル民法ノ改正委員……改
 正ニ大ナル關係ノアルモノデゴザイマセウガ、此人事訴訟法ハドウ云フ御扱
 ヒニナルノデゴザイマセウカ、是モ亦唯今ノ民事訴訟法改正委員ノ手ニ御付
 託ニナツテ、サウシテ結局、成案ヲ得タ上ニ御改メニナリ、御施行ニナルノデ
 アリマセウカ、或ハ現在ノ儘御扱ヒ置カレニナツテ居テ、何等カノ方法ヲ以
 テ、不都合ノナイヤウニ御施行ニナルノデアリマセウカ、ココイラノ點モ一
 ツ伺ヒタイノデアリマス、次ニ同ジ施行ニ屬スルノデアリマスガ、民事訴訟
 法ノ施行ガ圓滿ニ行ハルト云フコトハ、此訴訟取扱ニ、即チ訴訟公務ニ從
 事セラレル辯護士諸君ノ參與、協力ト云フモノガ極メテ必要ナルコトハ申
 ス迄モアリマセヌ、此辯護士法ト云フモノハ、度、或ハ間違ッテ居ルカモ知レ
 マセヌガ、舊民事訴訟法……現行民事訴訟法ガ施行ノ際カラシテ存シテ居ル
 モノデアリマシテ、ソレ以來ニハ少シモ改正ガ無イノデアリマス、而シテ此
 民事訴訟法ノ改正ト同時ニ、辯護士法ヲ改正ニナリマスコトハ、私ハ極メテ
 大切ナルコトデナカラウカト思フノデアリマス、現行辯護士法ハ、隨分缺陷ノ
 多イ法律ナリトシテ、世人モ其通りニ考ヘテ居ルノデゴザイマス、又現ニ辯
 護士法改正委員モ、法制審議會ノ中ニデアリマスルカ、或ハ司法省内ニカ、
 何レニカ御設ケニナツテ居ルコトヲ承ッテ居リマス、此民事訴訟法ノ施行ニ、
 非常ノ……ト申シマスカ、重大ナル關係ノアル、辯護士諸君ニ必要ナル法律、
 辯護士諸君ノ其人ヲ得ル、例ヘバ辯護士ノ養成、其他ニ於テ必要ナルコトヲ
 規定スルコトノ出來ヤウト思フ辯護士法ハ、イツ頃出來上ルノデアリマス
 カ、是モ一ツ伺フト同時ニ、辯護士法……民事訴訟法ハ、辯護士法ノ改正ヲ俟ッ

テ後ニ施行セラルルノデアアルカ、辯護士法ノ改正ノ前タルト否トヲ問ハズ、
 其法律ニハ不完全ナル所ガアルト否トヲ問ハズ、冤ニ角現行ノ儘ニ……辯護
 士法ハ現時ノ儘ニ、其儘ニシテ置イテ、サウシテ訴訟法ノミヲ實行セラルル
 ト云フ御考デアリマスルカ、此ノ點モ一ツ伺ヒタイノデアリマス、是ハ訴訟
 ノ新法律ガ其效力ヲ十分ニ舉ゲルト否トノ分レ目トモナルモノト、私ハ考ヘ
 ルノデゴザイマスルカラ、此點ニ付テモ伺ヒタイノデアリマス、之ヲ要スル
 ニ民事訴訟法新法ノ施行ノ時、施行ニ關シテ少カラザル關係ノアル他ノ法案
 等ハ、如何ニナサルノデアアルカ、又此新法ヲ實行スルニ付テハ、勿論經驗ニ
 富ンダル優良ナル司法官ヲ要スルト同時ニ、之ニ參與シテ司法ノ事務ノ進捗

ニ重大ナル關係ノアル、辯護士ノ職務ニ關スル法律ノ改正ヲ如何ニセラレル
 カト云フコト、竝ニ裁判官ノ……ト云ヒマスカ、司法官一般ニ、司法官ノ優
 遇法ハ如何ニナサルノデアアルカト云フ、此三點ヲ伺フ次第デアリマス、唯、是
 ダケデアリマス、述ベタイコトハ幾ラモアリマスガ、尙ホ法案ニ付テハ適當
 ノ時機ニ伺ヒタイコトモゴザイマスルガ、是ハ除ケマシテ、此法案ニ直接ニ
 關係ノアルコトダケヲ玆ニ申上ゲテ置キマス、之ヲ以テ質問ヲ終リマス

〔國務大臣江木翼君演壇ニ登ル〕

○國務大臣(江木翼君) 唯今富谷博士ヨリ御質疑ニナリマシタル三點ニ對シ
 マシテ御答ヲ申上ゲマス、第一點ハ本改正案ノ施行時期如何、是ハ法律案ノ文
 面ノ上ニ於キマシテ、御推察ノ如ク勅令ヲ以テ施行ノ時期ヲ定ムルコトニナ
 テ居ルノデゴザリマス、併ナガラ富谷博士モ縷々御述ベニナリマシタル如
 ク、本改正ハ民事訴訟法ノ中ノ最重要ナル部分ニ對シマシテ、頗ル重大ナ
 ル改正ヲ施サムトスルモノデゴザリマスルカラ、裁判所、辯護士、即チ司法
 部ヲ組織イタシマスル所ノ各機能ニ於キマシテハ、即チ實行ノ衝ニ當リマス
 ル各機關ニ於キマシテハ、十分ニ……此改正法案ノ意義精神ヲ十分ニ理解徹
 底スル必要ガアルト認ムルノデアリマス、從ヒマシテ改正案ガ議會ヲ通過イ
 タシマシテ、愈、實行ニ入りマスル迄ハ、準備ノ時期ト致シマシテ、裁判所方
 面ニ對シテ、司法行政部ガ之ガ徹底ニ努メマスルコトハ、固ヨリデゴザリマ
 スルシ、又裁判所ノ……司法部ノ一組織ヲ成シテ居リマスル辯護士方面ニ對
 シマシテモ、之ガ普及徹底ヲ圖リマスルコトハ、最も必要ナルコトデアルト思
 ヒマスル、故ニ目下ノ所ニ於キマシテハ、大正十七年中ニ施行ノ時期ヲ決メ
 タイト思ッテ居ルノデアリマス、今期議會ニ通過イタシマシタ場合ニ於キマシ
 テ、凡ソ一年半カ若クハ二年位ノ期間ヲ置キマシテ、十分ナル準備ヲ致シタ
 イト、斯ウ云フ希望ヲ有ッテ居ルノデゴザイマス、ソレカラ第二ニ、之ヲ施行
 スル人ニ對スルノ待遇如何ト云フ點デゴザリマス、申上ゲマスル迄モナク、
 今日裁判官全體ノ、所謂公正ヲ得テ居リマスルコト云フ點ニ於キマシテハ、殆
 ド國民一般ニ絶對ノ信用ヲ持ッテ居ルト申シテ宜イカト思フノデアリマス、裁
 判所ノ公正ヲ疑フト云フガ如キ點ハ、殆ド無キヤニ信ズルノデアリマス、此
 裁判所ノ公正ヲ確保スルト云フコトハ、一面ニ於キマシテハ、物質的、竝
 ニ精神的ノ待遇ヲ充實スルト云フコトハ、最も必要ナルコトデアラウト思フ
 ノデアリマス、資質ヲ改善スルノ必要ガアリマスルト同時ニ、又待遇ノ方ニ

於キマシテモ、是ハ改善ヲスルノ必要ガアラウト認ムルノデアリマス、行政官ニ對シマシテ、待遇ノ厚薄ヲ論ジマスルコトハ、暫ク差控ヘテ置キマシテ、今年度ノ豫算案ニ於キマシテハ、極メテ菲薄デハゴザリマスルガ、判事、檢事ニ對シテハ、少シバカリ待遇ノ改善ヲ爲スト云フ案ガ成立イタシテ、既ニ提案ニナツテ居ルノデゴザイマス、司法部限リニ於キマシテハ、此待遇ノ改善ヲ以テ必シモ足レリトスル譯デハナイノデゴザリマス、出來得ベクンバ、明年度モ明後年度モ、要求ヲ致シクイト思フテ居リマスルケレドモ、自カラ財政ノ都合等モアリマスルカラ、左様ナ事モ時ヲ見計ラフ外ナイト思フノデアリマスルガ、宛ニ角待遇ノ改善ヲ爲シマスル必要ノアルト云フコトハ、司法當局ニ於キマシテハ認メマシテ、既ニ其實行ニ著手ヲシ、案ノ提出ヲ致シテ居ルト云フコトヲ、御了知ヲ願ヒタイト思フノデアリマス、其待遇ノコトニ付キマシテ、東京區裁判所ノ如キ、例ヘバ監督判事ノ地位ノ如キハ、モウ少シ改善シタラ宜クハナイカト云フ御意見ノ如キハ、誠ニ御尤モニ思フノデアリマス、私ハ之ヲ觀察イタシマシタ度ニ、實ニ驚イタノデアリマス、非常ナ繁劇、非常ナ混雜、寧ロ混雜ト申シテ宜シイ事務ヲ執ッテ居リマスル、其監督ノ位置ニ立チマス者ノ待遇ハ、其職務ニ對シマシテ、何ダカ均衡ヲ得ナイ點ガアルガ如キ感ジヲ持ツノデアリマス、是等ノ點ニ對シマシテハ、此待遇改善ニ關シマスル豫算ノ通過ト共ニ、相當考慮ヲ拂ッテ見タイト思フテ居ル次第デアリマス、ソレカラ待遇改善ト云フコトヲ致シマスルト同時ニ、民事訴訟法、或ハ陪審法、或ハ其ノ他ノ重要ナル改正法律ガ施行セラレ、若クハ施行セラレムトスルニ際シマシテハ、裁判官全體ノ資質ヲ向上セシムル必要アルコトハ、司法部ニ於テモ夙ニ認メテ居ル點デゴザイマシテ、是ハ御質問デハゴザイマセヌデシタガ、一面待遇ヲ優ニ致シマスト共ニ、又司法官ノ資質ヲ良クスルト云フ目的ヲ以テマシテ、研究ニ關スル經費ナルモノヲ、司法省竝ニ裁判所ノ經費ノ中ニ要求イタシタノデゴザイマス、年々數十人ノ人ヲシテ……裁判官ヲ致シマシテ、東京等ニ見學ノタメ上京イタサセマシテ、恰モ實務及ビ學理ニ付テ、相當期間ノ間、學校ニアリマスルガ如キ状態ニ於テ、講究ヲ繼續セシムル、以テ一般ノ裨益トナシ、一般ノ裁判官ノ資質ヲ向上セシムルノ資ニ致シタイ、此點ヲ豫算案ノ中ニ合マシテ居ル次第デアリマス、第二ニ、此他ノ法律ノ部分トノ關係如何、例ヘバ強制執行ノ如キ、或ハ人事訴訟手續ノ如キ、或ハ辯護士法改正ノ如キト、如何ナル關係ガアル、御承知ノ如ク、

第一編乃至第五編ノ改正ヲ出シマシテ、第六編乃至第八編ハ之ヲ他日ニ期シテ居ル次第デゴザイマスガ、其ノ中デ最モ重要デアリマス所ノ、強制執行ノ部分ニ付キマシテハ、是ハ別個ノ特別法ト致シマシテ、競賣法ナドトノ關聯モゴザイマスデ、委員ニ付託ヲ致シマシテ、速ニ之ガ改正ノ完成ヲ致シタイト云フ積リヲ持ッテ居ルノデアリマス、申ス迄モナク裁判ノ手續ト執行ノ手續ト云フモノハ、當然、必然ノ因果關係ガアルモノデゴザイマセヌデ、必シモ同時デナクテ宜カラウト考ヘテ居ル次第デアリマス、ソレカラ第二ニ此人事訴訟手續法ハ、是ハ富谷博士モ御承知ノ如ク、法制審議會ノ方ニ於キマシテ家事審判ニ關スル法律ノ綱領ヲ既ニ御決議ニナリ、之ト相伴ヒマシテ人事訴訟手續法ヲ改正スベク、目下既ニ著手ニナツテ居ル次第デゴザイマス、是亦必シモ民事訴訟法ノ今回ノ改正案ト同時ニ施行ヲ要スルモノデモナカラウト考ヘテ居ル次第デゴザイマス、最後ニ此辯護士法ノ改正ハ、固ヨリ餘程必要ナルコトデアルト認メマシテ、既ニ辯護士法ニ判事檢事等ヨリ成立シテ居リマスル所ノ委員會ニ於キマシテ、目下審議ヲ急イデ居ル所ナンデアリマス、未ダ成案ヲ得ルニ至リマセヌデ、今期議會ニ之ヲ提出スルノ運ビニハナラヌカト思フテ居リマス、實ハ成ルベク急ギマシテ、早ク致シタイト思ヒマスル事由モ他ニアリマシテ、餘程急ギマシタノデアリマスルガ、ドウモ左程ニ參ラスノデアリマス、固ヨリ民事訴訟法ノ改正案ノ施行ニ付キマシテハ、辯護士ノ協力ヲ受クルノ必要ガアルドコロデアリマセヌ、辯護士其者ガ司法部ヲ組織スル裁判所構成法ノ中ノ一主要ナル機關ナンデアリマスルデ、民事訴訟ノ手續ヲ進行スル上ニ於キマシテ、當然辯護士ノ關與ガアリ、從テ辯護士ノ狀態ノ改善ニ向ヒマスルト云フコトハ必要デアリマスルコトハ、固ヨリ申ス迄モナイコトデアルト思フノデアリマス、併ナガラ改正案ト辯護士法ノ改正トガ、必シモ必然ノ因果ノ關係ガアルモノデハナカラウトウカニ思フノデアリマス、併ナガラ其關係ハ別ト致シマシテ、成ルベク急ギマシテ、實ハ次ノ議會マデニハ是非成案ヲ得テ提出ヲ致シタイト云フ、心組ヲ持ッテ居ル次第デゴザイマス、ドウカ左様ニ御承知ヲ願ヒタイ、是ダケヲ……

○富谷銚太郎君　モウ是ダケデ、アトハ議論ニナルコトデゴザイマスカラ、質問ハ是デ打切りマス

○議長(公傳徳川家達君)　此際諸君ニ御諮リ致シタイトゴザイマス、寺島資格審査委員長ヨリ、本會議中、資格審査委員會へ退席シタイト云フ要求

ガ議長ノ手許マデ申出ガゴザイマシタ、之ヲ許可スルコトニ御異存ゴザイマセスカ

〔異議ナシ〕ト呼フ者アリ

○議長(公爵徳川家達君) 御異議ナイト認メマス、且ツ今後、議事ガ追々繁忙ニ相成ルト考ヘマスカラ、本會期中ヲ通ジマシテ、本會議ノ開會中ト雖モ、常任委員會及特別委員會開會ノタメ退席ノ要求ガゴザイマシタ場合ニ、議長ニ於テ差支ナイト認メマシタ時ニハ、一々本議場ヘ御諮リヲ致サズニ許可ヲ致シタイト考ヘマスカ、ソレデ御異存ゴザイマセスカ

〔異議ナシ〕ト呼フ者アリ

○議長(公爵徳川家達君) 御異議ナイト認メマス、是ヨリ土方君ニ發言ヲ許シマス

〔土方寧君演壇ニ登ル〕

○土方寧君 此民事訴訟法中改正法律案デアリマス、之ヲ今日、政府ガ提出ニナリマシタルニ付テ、司法大臣カラ提案ノ御趣意ガ説明ニナッタヤウデアリマス、私ハ少シ遅刻イタシマシテ、初ノ部分ガ伺ヘマセナカッタケレドモ、御説明ヲ聽クマデモナク、此仕舞ニ、簡單デアリマスケレドモ、提出理由ガ記シテアリマス、是デ盡キテ居ルト思ヒマス、此民事訴訟法ノ改正案ハ、先刻富谷君モ言ハレマス通り、頗ル重要ナル法案デアルト考ヘマス、如何ニ民法商法其他ノ特別法ニ於テ、國民ノ權利ガ確保シテアリマシテモ、手續法ニ不備缺點ガアリマシタナラバ、是ガ十分保護セラレナイト云フコトニナリマスカラ、實體法ト輕重ナイ、頗ル重要ナル法案デアルト考ヘマス、サウシテ此法案ハ現行民事訴訟法ノ一編乃至五編……六編執行以下ハ別ニスルト云フコトデアリマス、一編乃至五編ノ大部分ノ改正ハ、殆ド改正ト云フヨリハ改造デアルト云、テ宜シカラウト思ヒマス、此法案ヲ慎重ニ審議スルト云フコトハ、容易ナコトデアリマセス、成ラウコトナラヌウ云フ法案ハ、議會ノ開會ノ初ニ御提出ニナリマシタナラバ、假令十二月ノ末カラ一月ノ末マデハ、休會デアリマシテモ、委員ノ手ニ配付ニナツテ居レバ、ソレヲ見ル時モアリマスガ、餘ス所僅ニ二十日餘リノ時期ニ於テ、斯ウ云フ重大ナ條文ノ多イ法案ヲ御提出ニナツテ、而モ司法大臣ハ慎重審議シテ協賛ヲ與ヘテ貫ヒタイト云フ希望ヲ述ベラレタ、定文句デアリマス、是ハ開院式ノ時ニ勅語ニ對シテモ、慎重審議スルト奉答シテアリマスカラ、是ハ我々議員ノ職責デアリマスカ、之ヲ短

時日ノ間ニセヨト云フコトハ不能デアリマス、茲デ此儘ナリ或ハ多少ノ修正ガアツテ、衆議院ヘ參リマス時ニハ、モウ既ニ衆議院ノ方デモ尙更時間ガ無クナルト思ヒマス、政府ハ果シテ斯ウ云フ時期ニ斯ウ云フ重大ナ、條文ノ多イ法律ヲ御提出ニナツテ、貴衆兩院トモ御通過ヲ圖ラレル御積リデアルカ、少シ無理ナ注文デアルト思ヒマスガ、ソレヲ御尋ネシタイ、提出ノ遅延シタト云フコトニ付テ、政府ノ怠慢ヲ別ニ非難スルト云フ程ノ意味デアリマセヌガ、私ハモット早く出スベキモノデアッタラウト思フ、ケレドモ此事ハ餘リ深く言ヒマセヌ、ナゼナレバ開會ノ初メニ御提出ニナツテ、我々ニ配付ニナツテ、十二月ノ二十日頃ニナツテ居リマシテモ、實ハ私ナゾハ讀ンデ見マセウト思ヒマスケレドモ、讀ンデモ能ク分ラナイト思ヒマス、法律ヲ專修シタ者デナケレバ……ナカク、判事辯護士等ノ訴訟ノ實際ニ從事シテ居ル者デナケレバ、利害得失便否等モ能ク分ラヌダラウト思ヒマス、法律ヲ專修ナサラヌ方ハ尙更ダラウト思ヒマス、假令早く出シタカラト云ツテ、實ハ字義通り慎重審議シテ是非ヲ批判スルト云フコトハ、實ニ困難ノ事ダラウト思フ、ソシテナラ旨判ヲ捺スカト云フト、ソレデハ議員ノ責任ガ付カナイ、ソコデ私ノ政府ノ所見ヲ伺ヒタイノハ、是ハ是デ原案ノ儘若クハ多少ノ修正ガアリマシテモ、貴衆兩院ヲ通過シタト見ル、實施期ハ勅令ニナツテ居リマスガ、富谷君ノ話デハ、マア大分大キナ改正デアルカラ、實務ニ從事シテ居ル人ニ研究ノ時ヲ與ヘル爲ニ、實施期ハ延バシタガ宜イト云フヤウナ、御趣意ノヤウニ聽キマシタガ、其時期ハ一體イツデアルカ分リマセヌガ、兎ニ角早晚、通過シタル以上ハ、サウシタナラバ從來、明治二十三年以來行ハレテ居リマス訴訟法ニ比シテ非常ナ改善デアル、今後ハ此訴訟法ニ依ツテ今マデ見タ所ノ色々ナ不平トカ訴訟ノ延滞等ハ無クナルカ、實行シタ上デ不備缺點ハ決シテ發見シナイト云フコトハ、私ハソレハ保證出來スト思フ、此起案者ハ二十年程前カラシテ委員ノ顔觸レハ大變ニ變ハツテ居ルヤウデアリマスガ、練リニ練ッタ案デアリマスカラ、曠立派ニ出來テ居ルト思ヒマス、ケレドモ人智ニハ限リガアル、將來ノ人智ヲ豫測スルコトハ殆ド出來ヌカラ、サウシテ訴訟ト云フモノハ是ハ變態ナモノデアリマスカラ、人間ノ頭デハ常態ノ事ハ想像シ得ルガ、變態ノ事ハムツカシイデスカラ、意外ナ故障ガ起ツテ來ルト、其場合ニハ此規則デヤ困ル、斯ウ云フコトデハ其點ガ不明ニナル、不備デアルト云フコトヲ必ズ發見スルデアラウト思フノデアリマス、サウ云フヤウナ事ガ起ツタ場合ニ此改正案

ヲ今度出サレルト同ジ様ニ民事訴訟法ト云フモノヲ二十三年ニ拵ヘテ、數十年ノ間ノ實驗上、色々ナ不備缺點ヲ發見シタケレドモ、ソレヲ改正スルト云フテ、二十年來委員ガ代リ代リテ審議シテ、ヤツト出來上ツタノデアリマス、サウ云フ調子ニ二十年ノ間、不備ナ手續法ト云フモノヲ、詰リ我慢ヲシテ居ッタ譯デアリマス、ソナナ事ヲシナイデ、何トカ今後ハ、ソレヲ實施シタ上ニ於テ、實驗上、不備缺點ヲ發見スル其都度、隨時改正スルコトニシタラドウデアラウト思ヒマス、ソレニ付キマシテハ、司法本省ノ官吏モ加ハテ宜シウゴザイマセウケレドモ、主モニ裁判ノ實際ニ當ル判事ノ中カラ常置委員ヲ設ケ、判事ナリ、辯護士カラ意見ヲ徵シ、コチカラ徵サナイデモ、向ウカラ申出ルノヲ受付ケテ、詮議シテ、不備デアルト云フヤウナモノハ、時ノ政府カラ政府案トシテ出スヤウニスレバ、誠ニ結構ナコトデアラウト思ヒマス、斯ウ云フ風ニ二十年間、其不備ヲ知リツツ我慢ヲシテ居ッテ、サウシテ急ニ改造スル、之ヲ諭ヘテ言ヘバ、家ガ少々破損スルノヲ打ッテ置イテ、モウ此儘デハ潰レテシマフト云フノデ、改造スルト云フノデハ實ニ不經濟ナ話デ、此長イ間、破損シタ家ニ住マツテ居ルノモ不便ナ話デアリマス、ソレヨリハ小修繕ヲ時々ヤツテ置ケバ改造セヌデモ宜イ、サウ云フヤウナ方法ヲ取ルノガ一番宜イト思ヒマス、此事ハ私ガ空ニ考ヘ出シタ事デアリマセヌ、英吉利ニ實例ガアリマスカラ、チヨット其事ヲ御參考ニ申シマシテ、サウシテ當局者ノ御意見ヲ伺ヒタイ、長イ事ハ申シマセヌ、御承知ノ通り、英吉利裁判所デハ十二三世紀頃ニ所謂「コンモンロー」ノ裁判所、習慣法ノ裁判所ガ三ツ出來マシタ、十四五世紀頃ニ所謂衡平法ノ裁判所「コート、オブ、チャンセリー」ト云フモノガ出來マシタ、其外ニモ色々ノ裁判所ガアリマスカ、何レモ同等ノ上級裁判所デアリマス、ソレガ數百年ノ長イ間行ハレテ居ッタ、其裁判所ニ、訴訟手續ト云フモノハ裁判所ガソレゾレ定メタモノデアリマスカラ、區々ニナツテ居ッタノデアリマス、尤モ慣習法ノ裁判所ノ手續ハ、裁判所デ別デアリマスケレドモ、同様ノ點ガ多クカッタノデアリマス、何レモ事實問題ハ陪審官ノ判斷ニ任カスト云フヤウニナツテ居リマシタノデ、共通ノ點ガ多クカッタノデアリマス、十四五世紀頃ニ出來タ衡平法ノ裁判所ニ於テハ、事實ノ判斷ハ判事ガ決スルト云フコトニナツテ居リマシテ、他ノ立法ニ於ケルト異ッテ居リマス、陪審ノ制度ニ依リマセヌ、是ハ序デノ事デアリマスカ、是ハ陪審制度ノ弊害ヲ矯正スル一ツトシテ起ッテ來タモノデアリマス、衡平裁判所ハサウ云フコトデ大分

違ッテ居リマス、ソナナ譯デ、數百年ノ間、同等ノ上級ノ裁判所ガ數種アツテ、其裁判手續ハ裁判所デ定メルノデアリマスカラ、區々ニナツテ不便ナ點モ多クアツタノデアリマス、ソレガ爲ニ十九世紀、殊ニ千八百三十五年以後ニ、本當ノ輿論ノ代表トシテ、議會ニ於テハ從來ノ英吉利現行法ト云フモノヲ盛ニ改廢シテ居リマス、其一ツトシテ、三ツノ裁判所デ區々ニナツテ居ル手續ノ不備缺點ノアル所ハ、成ルベク統一スルト云フ風ニ數回改正ハシテ居リマスカ、ソレハ小規模ニ止マツテ居ッタノデアリマス、然ルニ千八百七十三年カラ千八百七十五年ニ跨ル、何ト云ヒマスカ、司法條例ト申シマスカ「ジュヂケチュ、アクト」ニ依ッテ、從來ノ上級ノ數種ノ裁判所ヲ統一スルコトニナリマシタ、其統一スルニ付テハ、統一セラレル裁判所ニ於テ訴訟手續ヲ統一スル、其統一セラレタ訴訟法ハドウシテ定メルカト云フト、「ジュヂケチュ、アクト」ノ法文ニ依ッテ判事ノ委員ヲ設ケマシテ……常置シテ居リマス、「スタンディング、コムミッティー」ヲ、判事ノ委員ヲ拵ヘマシテ、其委員ノ成案ト云フモノヲ政府案トシテ、議會ノ協贊ヲ經テ法律ニナツタノガ八十二年デアリマス、其後、其委員ハ常置委員デアリマスカ、年々必要ニ應ジテ修正ヲ加ヘテ茲ニ至ッテ居リマス、是等ハ誠ニ便宜ナ方法デ、私ノ考デハ此案ヲ二十年モ掛ッテ拵ヘテ、其間修正セラレベキモノデアアルモノヲ其儘ニシテ置イテ、遂ニ大改造スルコトニナツタ、ソナナコトヲセズニ、之ヲ實地ノ上ニ、實務ノ上ニ於テ實驗上アアトカ斯ウトカ修正意見ガアレバ、或ハ辯護士カラデモ宜シウゴザイマス、申立ヲシテ、ソレヲ審査セラレ、修正案ヲ出ス、時ノ政府ガ其部分部分ニ付テノ修正案ヲ出スコトニシタナラバ、今後ソナナコトハセヌデモ濟ムデアラウ、ソレナラ我々モ説明ヲ聽ケバ本當ニ慎重審議ガ出來ヤウト思ヒマス、コンナ浩瀚ナルモノヲ短時日ノ間ニ慎重審議セヨト云ハレルノハ無理デアアル、詰リ官判ヲ押スト同様ナ事ニナル、結果ハサウナル、序デニ申シマスカ、英吉利ノ議會ハ御承知ノ通り、ドコノ議會ヨリハ大變ニ萬能力ガアルト稱セラレ居ルモノデアリマスカ、非常ニ英吉利人ハ實際ノ方ニ重キヲ置イテ居ルト云フコトガ、斯ウ云フコトデ分リマス、判事ノ常置委員ノ成案ヲ、時ノ政府ガ法律案トシテ出シマス時ニ、斯ウ云フコトヲシタデス、議會ニハ提出スルケレドモ、日程ニハ上ボセナイ、提出シテアリマスカラ議員ハ隨意ニ其法律案ヲ調査スルコトハ出來マス、サウシテ見タ上デ、此點ハドウモ宜クナイカラ斯ウ改正スベキモノデアルト云フヤウナ、色々ナ

意見ガアリマスレバ、特ニ議場デ動議シテ日程ニ上ボセテ其點ヲ審議スル、何モ動議スルコトガ無ケレバ日程ニ上ボセナイ、會議中、議案ハ提出シテアツテモ、何モ動議ヲスルト云フ意見ガ無ケレバ、三讀會ヲ經テ可決シタモノト云フ便法ヲ執ッタノデアリマス、ナゼ、ソレナ事ヲシタカト云フト、英吉利ノ衆議院ニハ法律家モ居リマスケレドモ、法律ノ實務ニ從事シテ居ル者ハ極ク少數デアリマス、サウ云フ人達ガ、實驗ヲ經タ人達ガ、作ッタモノヲイデッテ見タッテ宜クナラナイデヤナイカ、却テ悪クナルコトガアル、手續法デアリマセヌデモ外ノ法律デモ、議會デ修正ニナツテ、多クノ場合ニ於テ、何時デモ後ニ行ッテ疑義ヲ起スト云ッテ居リマス、立案シテ行ク者ニアリマシテハ、初カラ終リマデ頭ノ前後ノ聯絡ヲ取ッテ起案シテ居リマスガ、其一部分ニ付テ修正ガアリ、ソレガ通ッタルコトニナリマス、前後合ハナイヤウナコトガ能ク起ッテ來ルノデアリマス、英吉利ノ判例ナドヲ見マス、判事ガ……始終、議會デ成案ヲイデクルモノダカラ能ク疑ヲ起シテ困ルト云フ、小言ヲ言ッテ居ル判事ガ澤山アリマス、ソレハ實體法デモサウデアリマス、訴訟手續法ニ於テハ尙更ノコトデアリマス、ソレダカラ今申シマサウナ便法ヲ取ッテ、此例ハ外ニアリマス、之ヲ真似シヤウト云フノデアリマセヌガ、サウ云フ事モアルノダシ、コンナ大キナモノデナシニ、隨時極ク僅ナ點ニ付テノ必要ナル改正ヲ時ノ政府ガ出スト云フコトニシタナラバ、此内容ヲ能ク説明ヲ聽イテ、熟慮シテ批判ヲスルコトモ出來マセウ、此儘デヤツテ、二十三年ニ拵ヘタモノト同ジヤウニ、今後不便ヲ感ジテモ、何十年モ打ッテ置イテ、又改造スト云フコトハ愚ナ話ト思ヒマスカラ、ドウカ私ノ考デハ、判事ノ中ニ常置委員ヲ設置シテ、民事訴訟法ノ常置委員ヲ設置シテ、大審院カラ區裁判所マデ諮問スル、總テノ裁判所ノ判事或ハ辯護士カラ改正ノ意見ガアレバ之ヲ申立テテ、ソレヲ詮議スル、適當デアッタナラバ改正案ヲ作ッテ、時ノ政府カラ提出スル、斯ウ云フ風ニシタナラバ宜カラウト思ヒマスガ、私ノ質問ハサウ云フ常置委員ヲ設ケルガ宜イト思フノデアリマスガ、政府ノ御考ハドウデアルカ、ソレヲ伺ヒタイノデアリマス

〔國務大臣江木翼君演壇ニ登ル〕

○國務大臣(江木翼君) 唯今ノ土方博士ノ御質問ニ御答ヲ致シマス、提案ノ時期ガ誠ニ遅レタノハ甚ダ不都合デアアル、誠ニ斯カル大法案ヲ出シマスルト致シマシテハ、多少遅延イタシマシタ感ガ無イデハナイノデアリマス、併シ

此法案ヲ、委員會ニ於テ成案ヲ得マスルヤ、委員會ノ成案ト致シマシテ、裁判所ナリ、或ハ辯護士協會、或ハ大學ノ方面ナリヘ公ケニ致シマシテ、ソレゾレ批評ヲ仰イダ譯デアリマス、相當實務家ノ方面ニ於キマシテハ、之ニ對シテ意見ヲ闘ハサレ、考究セラレマスル時間ガアツタカト認メタノデアリマス、然ルニ此議會ニ提出トナリマスルト、色々ノ法律トノ關係ナドヲ考究イタシマスルニ、ナカク、面倒ガゴザイマス、實ハ非常ニ急ギマシテ、議會ノ劈頭ニ出シタイト念掛ケタノデアリマス、其通りニ參リマセヌデ、博士ノ仰セノ如ク、少シク遅レマシタコトハ、誠ニ恐縮ニ存ジテ居ル次第デアリマス、御諒察ヲ願フ外ナイノデゴザイマス、ソレカラ、將來、不備ノ點ガ出來タナラバ、其都度、改正案ヲ出サウニ常置ノ調査委員ヲ設ケタラドウカト云フ點ハ、誠ニ御尤モノ點ト思フノデゴザイマス、不便ヲ恐ビ恐シデ何十年間置クト云フコトハ、如何ニモ適當デナイヤウニ思フノデゴザイマスガ、併シ委員會ヲ設置イタシマストナリマス、又彼レ此レノ考究ヲ要スルコトト思ヒマスルデ、是モ土方博士ノ意見ハ極メテ尊重スベキ御意見ナリト致シマシテ、十分ノ考慮ヲ拂ヒタイト存ズルノデアリマス、是ダケ此際御答ヲ申上ゲテ置キマス

○子爵八條隆正君 本案ノ特別委員ハ十五名トセラレムコトヲ希望イタシマス

○議長(公爵德川家達君) 八條子爵、兩案トモ東ネテ同一委員ニ付託シテ、委員ノ數ハ十五名、サウ議長ハ解シテ宜シウゴザイマスカ

○子爵八條隆正君 其通り御解釋ヲ願ヒマス

○男爵阪谷芳郎君 賛成イタシマス

○議長(公爵德川家達君) 八條子爵ノ兩案ノ特別委員ノ數ヲ十五名トナシ……勿論議長ニ於テ指名シテ宜イノデゴザリマセウ……

○子爵八條隆正君 本會期中、議長指名ニ一任シテアルト思ヒマス

○議長(公爵德川家達君) 八條子爵ノ動議ニ同意ノ諸君ノ起立ヲ請ヒマス

起立者 多數

○議長(公爵德川家達君) 過半数ト認メマス、書記官ヲシテ特別委員ノ氏名ヲ朗讀イタサセマス

〔小林書記官朗讀〕

民事訴訟法中改正法律案外一件特別委員

子爵 酒井 忠亮君 子爵 伊東 祐弘君 子爵 森 俊成君
子爵 板倉 勝憲君 水上 長次郎君 渡邊 暢君
河村 讓三郎君 志水 小一郎君 男爵 池田 長康君
男爵 松岡 均平君 男爵 渡邊 修二君 安立 綱之君
永田 秀次郎君 佐竹 三吾君 田村 新吉君
○議長(公爵德川家達君) 明後十七日午前十時ヨリ開會イタシマス、議事日
程ハ後ヨリ御通知ニ及ビマス、本日ハ是ニテ散會イタシマス
午前十一時二十五分散會

